

日本簿記学会「現代簿記論に関する研究」インタビュー

2012年2月28日 於駒澤大学

橋本 本日は日本簿記学会、簿記理論研究部会の現代簿記論に関する研究の一環として、駒澤大学の石川純治先生に、お時間とっていただきまして、どうもありがとうございます。よろしく願いいたします。じゃあ、ここから和田先生に代わりますので、よろしく願いします。

石川 ちょっとその前に、石巻からわざわざ竹中さんが参加されていますが、石巻はご周知のとおり大震災でもっと大きな被害をうけたところですので、「現代簿記論に関する研究」という前に、大震災の現地から、インタビューに先立って何か一言お願いできれば有り難いですね。

と言うのも、阪神大地震にときもそうでしたが、これだけの大災害をまえにして、皆さんも同じだとは思いますが、自分たちがこれまでやってきたことに根底からの無力感や空虚感にかられてしまう。これは簿記会計にかぎりませんね。いったい何のための研究、そして教育なのか。

竹中 はい、何か一言ということですが、震災前に比べれば不自由もありますが、石巻中心部での生活はほぼ日常を取り戻した感があります。それに伴って、震災への関心の薄れを感じるようになってきています。無論、震災がもたらしたものはさまざまですから、そのすべてについて無関心であるという意味ではありませんが、震災の被害や影響は同じく石巻に住んでいてもそれぞれに異なっています。私のようにほとんど直接の被害を受けなかったものは、震災前とほとんど変わらない日常に、何事も無かったかのように錯覚することさえあります。時間の経過とともに震災への関心の温度差がいわれるようになってきましたが、被災地とそれ以外の地域にだけでなく、被災地内にも温度差がみられるように思われます。

震災このかた、被災を免れたというある種のやましきもあって、被災者や被災地のお役に立ちたいと思う一方で、公私共に大したことはできずにまいりました。震災直後から何度となく職場の同僚とも話しあってきたことですが、医学などは震災時に直接役立ちますし、工学などは復興に大いに役立ちます。それでは会計学はどうか。今に至っても答えは出ません。ただ、せめて関心を持ち続ける、そして、何か出来ないか考え続ける。それが大事なのではないかと、最近とみにそのように感じております。

石川 おっしゃる通り、「考え続ける」、これが大切ですね。特に、今どういう性質の危機にあるのか、それを深く考え続ける必要がある。なのに、1年という年月が、ふたたび日常的な仕事にもどしているんです。阪神大震災後と同じ経過をたどっているわけで、“たこつぼ的”な仕事に終始する日常にぞっとすらします、一種の自己欺瞞と自己嫌悪。このイ

インタビューもある種そうだな、本来なら、受けてはいけない。

非日常がずっとあるいは一生続いている人たちがいる一方で、その非日常が一過性、一時的な人たちが大勢いるわけ。簿記会計の教育・研究もまたしかり。安泰な生活という大前提あってこそですが、その前提は危ういもので、いつ非日常化しかねません。確固とした根拠のあるもんじゃない。

ちなみに、竹中さんがいみじくも言われた「やましさ」なんですけど、それをつきつめていけば、無力感ひいては自己否定的、あるいは自己欺瞞性になってくるな。これに関連して、『複式簿記のサイエンス』のコラム6（「教養」としての会計学）、それに「会計研究のアンビバレンス—たかが会計、されど会計—」（慶応大学での講演、2004年）でも触れたんですが、簿記会計の研究や教育が真の意味での「教養」（自己形成や生き方に深くかかわる）につながるのか、あるいは「たかが会計、されど会計」の「されど会計」にどうつながるのか、そういう切実な思いや葛藤と密接にかかわります。

だから、そうした思いをぬきにしては、「会計研究のアンビバレンはこれからもずっと続き、生涯解放されることはない」と言ったんです。そういう思いは、今どういう性質の危機にあるのか、「原子カムラ」なんかにも象徴されているんですが、まあそういった負の全体像といったものを考えると一層大きなものになっているといえますね。この点は、あとの教育のあり方、教育観、という点で是非もう一度触れたいですね。

## I 共通質問項目

### 1) 先生のバックグラウンド—アイジリとの出会い

和田 よろしくお願いいたします。ではまず、最初に共通質問項目のほうから、質問させていただきます。最初に、先生のバックグラウンドということで、先生が大学に入学されて以降、どのようにして簿記会計と出会い、そして最終的に簿記会計の研究者を志そうとしたきっかけ等につきまして、簡単にお話しいただければと思います。よろしくお願いいたします。

石川 この点、そういう質問があるだろうということで、関連文献の⑭を加えたんです。これはホームページに、先の「会計研究のアンビバレンス」という、慶応義塾で2004年の1月にお話ししたんですが、これを詳しく見ていただければ、僕がこういう道に入ってきた、幸か不幸か、そのことを書いています。まさに幸か不幸か、どちらかわからんです。で、簡単に言うと、アイジリとの出会いってというのが非常に大きかったですね。アイジリ、これは院生のときの実務補修の時代なんですけれども、大阪の梅田での実務補修、公認会計士の2次試験合格後の研修ですが、そこでアイジリの話、それが井尻先生だということは、もちろん知らないんですけど、そのことに少し触れているんです。

日本から非常に著名なプロフェッサー、アイジリが来るからってあって、日本の研究者がたいそう集まったという話なのよ。ところが会ってみたら、日本人だというわけ。アイ

ジリじゃなくて、井尻だというわけだ。それで評価がガタンと落ちた、という話(笑)。これを梅田で私、聞いて、日本のアカデミズムの偏狭さというか、それを象徴する話だと思うんですよ。私はそのときに、早速、実務補修の帰りに、梅田の書店で、今でも覚えているな、旭屋か。あそこだったと思うんだけど、『計数管理の基礎』という岩波の本。ご存じかな？『会計測定の基礎』の方は僕、その後で、読むんですけどね。これが僕のそもそものきっかけです。この話を慶応でしたんですが、要するに『計数管理の基礎』、読んでない人たくさんいると思うんですが、LP、線型計画法、それと要するに数学と会計の融合というのを、僕、見たんです。これが僕のアイジリ、井尻先生を知ったきっかけ。これが僕の出発点だと言えます。

その後、『会計測定の基礎』ですね、1968年出版、で、会計にどんどん入っていく。で、中西寅雄ってご存じかな、その先生が、日経図書文化賞をとったときの講評を書いているわけ。まあ余談ですけど、何年前かな、古希記念のパーティーをここ駒澤でやったんですよ。全国から先生方を集めて。で、たくさんの方が来られたんです。井尻先生もここで、駒大でお祝いのパーティーをやったときに、私そのことを紹介したんです、中西寅雄。で、そのときの井尻先生の新聞の写真の話、俳優の誰かに似ているとか、いろんな話を僕、したんですけどね。中西寅雄はどういうことを言っているかということ、「科学としての会計学は著者によって初めて基礎づけられたといっても過言でないであろう」と絶賛して、8年ぶりの日経特別賞だということになるわけです。僕はそのときに、その形容、つまり「科学としての」、その「科学」ということが、僕にとって非常に関心事になって、後々これに僕はかなりこだわってきた。井尻先生の作品でいけば、『会計測定の基礎』から『会計測定の理論』と、先の『計数管理の基礎』、この3部作です、私のきっかけは。で、修士論文は、その foundation から theory へつながっていく中で、全く変わってないストラクチャー、公理的構造をね。それを僕は徹底して勉強したっていうのが、会計学との出会いというなら、そこは語らないと後々つながらないかな、というふうに思いますけどね。まだまだ、その後はあります。詳しくは④の「会計研究のアンビバレンス」を、ホームページに載せているから、読んでもらえればいいんですけども。

結局、僕は、後でカーネギーメロンに行くことになるんですけど、最初に赴任した福岡大学では、会計学の講義は一切持ってません。僕の担当はオペレーションズ・リサーチ (OR) ですから。だから最初の赴任した福岡大学で、私が最初に書いたテキスト、これは福岡のローカルの出版社だけでも、『経営数学とオペレーションズ・リサーチ』というテキスト、1984年だから30年ほど前になるのかな。だから僕は、会計は素人よ。後で大阪市大で会計学を担当するんだけど、福岡のずっと5年間はORやってたんです。だから僕は、学会所属は全部OR学会。あとは「会計研究のアンビバレンス」に、カーネギーメロンでの面白い話を全部書いているから見てください。

一言だけいうと、僕は井尻先生にセオリーとか、いろんなそういうことを習ったというよりは、僕の最大の収穫は何かといたら、人間井尻に触れたということなんです。井尻作品もさることながら、人間に触れた、だから「人間井尻」ということ、本当にそこにい

ろいろ書いてます。例えば簡単に言うと、いつも手ぶらなんです。小さなメモとペンしか持ち歩かない。そういう尋常でないスマートさ。それから、何事も先送りしない、もう即決。決め方がめちゃくちゃ早い。そういういろんな点で身近にいて、井尻ファンになる人が。どこにその人間井尻の魅力を感じるか、そういうことを僕はそばにいて随分感じました。学問的権威じゃないということですよ。

僕はその後、実は井尻先生とある意味で全然違うタイプの、畠中とか。畠中福一の『勘定理論研究』、ご存じですか、森山書店の。これは驚いたね。僕が今でも印象に残ってるのは金色のタイトル『勘定理論研究』、これはもう興奮して一晩で読んだんですよ。それで若干20いくつで亡くなるのかな、畠中福一。それから僕は木村和三郎にあって、こういう日本の古典をやっていくんです。

そういうふうには、ORから始まって、どんどん会計に入っていったんだけど、やっぱり根っここのところは会計に馴染まないところがあるわね。ところが、いつもそれを押しとどめて、会計に戻られるというのか、引き戻されるきっかけは、またやっぱり井尻作品なんです。それは僕にとっては、幸か不幸かわかりませんが、その後のたくさんの作品は、少なくとも僕はもうかなり読んでいきました。井尻先生の人となりは、放送大学のゲストで出ておられますから、ここの駒澤大学の国際センターで、たいへん美しい日本庭園のあるところですが、そこでロケをしましたので是非ご覧いただきたいですね。まだまだ、いっぱいあるんだけど、関心のある方はホームページに載せているから。

その「会計研究のアンビバレンス」のサブタイトルに「たかが会計、されど会計」って書いてるんだけど、僕はその、「されど会計」をどう追求していくかっていう。「たかが会計、されど会計」、これです。だから、僕の最初の「されど会計」を見つけたというか、発見したというのが、井尻先生の著作なんです。

でも、やっぱり「たかが会計」と思う人、たくさんいるでしょ。経済学やっている人なんか。そう思いませんか。

## 2) 簿記の位置—検定簿記か歴史か、情報か記録か

和田 はい。ありがとうございます。共通質問事項の次は、少々簿記教育について質問をさせていただきます。まず、最初の質問ですけれども、会計学全体のカリキュラムの中で、簿記というものをどのように位置づけるかという点について、先生のお考えをお伺いしたいと思います。

石川 簿記教育の位置づけか。どういうふうにご答えたらいいんだろうね(一同笑い)。普通はどうなのかな、入り口だと言う人もいんでしょうね。まず簿記の、これまた後で出てくると思うんだけど、簿記検定の3級ぐらいが基礎だと、こうね。それはやっぱり、簿記と会計の関係ということにも関わるでしょうね。簿記やってから会計やると、なんか別個のものがあって、後先の問題やなくて、だからそれはそれぞれのとらえ方あるんだけど。

1つ、やっぱり歴史というものを重視する立場からすると、それはもう、全然また、ガ

ラッと違う見方が出てくるかもしれませんね。これも後で触れたいと思うんですけど。だから、簿記というものをどういうようにとらえるか、考えるかということと、これと密に関わってくる話で、特に後で出てくると思うんだけど、現代の会計を考えるときの、複式簿記の理論というものの意義というか、ほとんど IFRS ばかりなんで、複式簿記の議論ってというのは、ほとんど出てこないでしょう。

だから、一番わかりやすい言い方すれば、複式簿記不要不在の会計、今の会計は。だってそうでしょ、IFRS の勉強してる人たち、別に複式簿記とか簿記の話、全然出てこないじゃないですか。しかも期中よりも期末、記録よりも情報重視、という話ね。あとでまた議論しましょう、とりあえず。

### 3) 簿記授業のシラバスー相対化の力を

和田 ありがとうございます。続きまして、こちらも大変難しい質問になってしまうのですが、先生が理想とされます簿記の授業のシラバスというものを、もしございましたら、お示しいただければと思います。

石川 そんな、もう大家の先生が答えることで、僕なんか別に考えてもないんだけど。安平先生とか、その大家にさ、インタビューするような話で。実際、僕はシラバスなんか全然ないんだけど、もし僕がそういう講義せよと、そして1つの体系というか、オーガニゼーションをやれといたら、僕は去年出したこの本（『複式簿記のサイエンス』）、この順番ですよ。

例えば本の帯に、帯なんていうのはみな捨てちゃうだろうから、読みはせんだろうけど、ここに書いてあるとおり、つまり常に問いを、それもビッグ・クエスチョンを出すわけ。例えば、この帯に書いているように、現行の貸借複式の仕訳方法は唯一絶対のものか、なぜ複式から3式への展開を考えるのか、言語としての簿記の本質は何か、利益とキャッシュはどのような関係にあるか、なぜ発展的にとらえることが重要か、こういったことに即したシラバスというのを、僕の本はそういうかたちで、5つのテーマ構成（テーマⅠ～Ⅴ）をとっているんです。もちろんこういうことをやっている人は、誰もいないと思うんですけども。そして、各テーマのなかで4つ、5つの問いかけをしています。こういうものを組織化し、体系化して、教育したいですね。

これは後の話とも関わるんだけど、「簿記の3級、教えないんですか?」、こうなるわけ。教えたくないんです、僕は、少なくとも大学では。大学での簿記教育のあり方っていうものを、やっぱり真剣に考えるわけですよ。専門学校でやっていることを、大学でやって何ら問題ないという考え方もあるでしょうし、簿記教育は日商の3級プラスアルファぐらいで十分だという人もあるでしょう。それはそれで1つの考え方かもしれない。じゃあ僕はどうかといたら、僕はそういう考えをとらない。やっぱり専門学校じゃない、大学に来た人を教えるとなると、自ずと違う教育があるべきだろうと。そういう意味では、僕のこの本なんか、大原やTACで絶対教えられませんよね(一同笑い)。

実は、意外にあまり簿記を知らない人、例えば1年生なんか、僕は他の大学の集中講義で教えてるんですけど、集中的に結構理解してくれますよ。だから、放送大学の講義でそれを私が中心に置いているんだけど、「学ぶ喜び」っていうかな、喜びの内容、性格っていうか、質の問題ですよ。3級とって2級とって、さあ難関の1級、これまた、ある種の喜びだよ、そうでしょ？それは僕もわかる。でも、歴史の中で生々しく発展してきた、そういう歴史の中で簿記会計というものをとらえていく、この喜びとは、やっぱり性格違うと僕は思うんです。

ですから、私が一言で言えば、大学で教える簿記教育の1つのあり方は、端的に言えば、社会科学としての簿記・会計。で、問題は、社会科学としてということ、どういうふう理解するかですよ。どうしても、それは歴史の文脈でとらえるっていうこと抜きには、やっぱり社会科学としての簿記・会計っていう教育は決定的に欠落するだろうと僕、思ってる。だって数学だって数学の歴史がある。自然科学だって歴史あるわけよ、そうでしょう。だから理想とする簿記教育は何かあっていったら、本の最後あたりにも書いているんだけど、「見えてくる」学習という点、ここ強調したいですね。

そのキーワードは何かというと、この本で最後まで徹底したのは、読まれた方はわかると思うんですけど、「相対化」です。それも2つね。歴史の中で相対化するっていうのと、それから理論、論理の中で相対化していくっていう、この2つあるんですよ、相対化というのは。それはまたバラバラじゃないんです。それがどっか、つながっていくんです。それが僕の理想とする、もし理想とするものが何かと言われたら、この相対化の力をつちかうということ、これが僕の教育の根本にあるね、そういう教育をしたいね。本の最後あたりで、端的に「相対化なくして真の姿は見えない」と言いました。これです。

そうすると、もう専門学校あるいは検定簿記だとか受験簿記とはまるで違う簿記というものが、学生になかに入っていく。それは、この「知る喜び」とか、「学ぶ喜び」という、僕が思ってる、また実際経験してきたその喜びに、やっぱりつながっていくんだと思う。3級から2級への喜びとは、また違う性格だろうと。大学で本来、学生にそういう喜びというかな、きっかけを与えていくものは何かと言ったら、僕はそちらだと思う。これは専門学校の先生方、教えられないんです。でも現実には、そういうものではないですね。

だから3級あるいは2級の資格とっている学生は、ある種の単位互換みたいなかたちで、私はそういう、まあはっきり言えば僕は安易だと思ってるんだけど、なんで安易かという、そういう理想から見たら、もう典型的でしょ。教えもせずに単位、それも3級の資格があれば単位を(笑)、しかもAを与える。それはあまりにも安易な教育になってないかなと思いますけど、僕は。

和田 はい、ありがとうございました。

石川 共通質問の中に、なんか固有なものがいっぱい入ってきて、申し訳ないね。

橋本 それで結構です。

石川 僕にとったらもうトータル、全部トータルなんよ。もちろんそれを個々バラバラにお話しすることはできますけどね。次は基本等式？

#### 4) 基本等式と勘定理論について

和田 はい。続いてお願いします。

石川 これも、基本等式の問題というのは、簿記と会計をつなぐものですね。だから基本等式、ここに書いてると思うんですが、用意した参考資料の1ページの1番下、簿記と会計の関係というところの文献②（「試算表等式論覚書(2)」1993年）の「2項化問題」と、「2項の関係問題」、難しい言葉を使ってるんだけど、それから図表 15.1 というのは⑦（『複式簿記のサイエンス』2011年）だから、この本持っておられる方、図表 15.1 見てください。なんか大学の先生の前なのに、学生に教えているみたいで非常にやりにくいんだけど。最後の15章、258ページです。

つまり、基本等式っていうものが、 $X=Y$ 、あるいは $X\equiv Y$ の恒等式になるのもあるけど、基本等式のさらに基礎に理論性が、構造論があるんです。あるいは、もっと言えば、会計思考があるわけです。その点については、251ページですけど、14章の付論10「勘定学説と会計思考」というところを書いてますから。つまり、基本等式に行く前、あるいはその基礎に、勘定学説と会計思考というところなんです。それが基本等式というものの設定、僕の言葉で言えば、2項化問題、まずXとYの設定、それから次はその2つの関係、XとYとの関係、それを14章では全部ある種モデル化して、展開表で全部示したわけ。ですから、基本等式、勘定理論というのは、複式簿記と会計の思考とか、あるいは会計の理論性とか会計性という言葉使ったんだけど、そこにつながる。

もう一度、図表 15.1 見てください、そのつながりの最後に複式簿記の技術機構みたいなこと書いてるでしょう、複式簿記機構(技術性)と、だから理論性と技術性。そして基本等式の中に、いわば会計性が現れると、そこに各学説の会計構造が反映される、そう書いてます。図表 15.1 の上の、Aのアンサーのところですよ。ですから、こういう考え方でいくと、現代の会計と複式簿記というもの、例えばIFRS、あるいはそのベースにある概念フレームワークですよ、日本じゃなくて、海外の。そこに何か、端的に言えば、基本等式、会計構造って想定できるのか、という話につながるよ。これはまた後でお話しますが、僕は非常にそういうのは難しいだろうと思ってるんです。確かに一見すると、資本等式の構造を持っているわけ、概念フレームワークを見たらね、そうでしょ。あとは、どんどん行きましょうか。

和田 勘定理論について。

石川 基本等式と勘定理論か。勘定理論というのは、会計構造論ということかな？

和田 それも先生方によって、とらえ方がさまざまだと思うのですが。

石川 あー、本当。じゃあ勘定理論といたら、具体的に言うと、例えば貸借対照表等式？あるいは資本等式？あれは勘定理論じゃないのかね。だからある意味では、基本等式の理論的説明というのは勘定理論であり、会計構造論である、そういう見方できるんじゃないかと思うんだけど。もし、もっと広く、勘定理論というものを、勘定に関する理論だとか、勘定と勘定の中の体系とか関連の問題だとか、そうしてその中で僕が言ってる、XとYという、5勘定カテゴリーのXとYの置き方、置いた後のその2項の関係問題になってくる。X=Y、あるいは $X \equiv Y$ だから、ここでそう置いちゃったんだから、その中に会計構造論入ってくるわけよ。これは勘定理論と言ってもいいんだけど。もっと広くいくんだしたら、何んで2つなんだと。3つは、勘定理論じゃないのかと。そんなことないよね。X=Y=Z、これはまた後で「3式簿記」の話になるんだけど。だから一般的にそういう、勘定と勘定の関係を全体の構造を問う問題だといったら、3式簿記だけじゃなくて。だって、僕はキャッシュフロー計算の会計構造みたいなことも考えたからね。これも、あとで。

#### 5) 商品売買取引の処理方法について—三分法の問題性

和田 はい、ありがとうございました。続きまして、商品売買取引の処理方法について、先生のお考えを(笑)。

石川 考えるというか、まず、分記法、総記法、三分法か。皆さんどう思ってるんだろうね。三分法っていうのは完全にあれだな、ワルプ的で、擬制でしょ。ね。でも3級で絶対これやらないとね。

和田 そうですね。

石川 だから、期首商品、期末商品のあの仕訳を、どうやって説明するかちゅうわけよね。僕はもう徹底して、わかりやすく教えるんですけどね。(笑)あの仕訳は売上原価をどうやって計算するかという話だから、テクニカルよと。だから分記法だと。でも分記法も、問題あるよ、総額主義に反するから。では、総記法はどうだ、総記法は分割する前の話だから、あれはもう、すごい混在があるわけですよ。だから総記法から三分法に行くわけ。

でも、キャッシュフローの話しをすると、どうしても分記法なんですよ、実際の出入りだから。だから、総記法、三分法については、この文献⑤(『キャッシュ・フロー簿記会計論』)はお持ちじゃないかもしれないけれど、58ページか。もしお持ちなら、キャッシュフロー、ここにですね、注20に太字で「総記法」って書いてるでしょ。これと注21を見といてもらえば、そこに書いています。総記法では商品売買損益が貸借差額になるんです

よね。これは皆さんもよく知っていると思うんですけども。注 21 で特に安平先生の考え方や、それから茂木先生、会計史の観点から、こういうところ面白いね。

和田 先生、私の記憶が確かなら、ご著書の中で、売上高・売上原価表示法が、最も理論的な方法であると述べられておりましたが。

石川 僕はそう思う。やっぱり売上原価という独立の勘定でやったほうが、学生もわかりやすいし、なんで仕入勘定で売上原価を計算するのか言われたら、もっともなことだと思いますよ。独立させて、売上原価の勘定をもってこい、というわけよ。

和田 はい。私も最初から、売上高・売上原価表示法で教えればいいのではないかと思うことが多々ありまして、最初はどうしても、簿記のテキストで分記法が取り上げられていますので、商品の仕入れは商品勘定を使うように教えますが、その頭で、突然、三分法が出てきまして、なかなか取引に仕入勘定を使えない学生が多いです。

石川 理屈のたつ人だと、三分法での仕入勘定の性格はなんだと、こうなるわけですよ。

和田 そうですね、そこの、はい。

石川 だから、つまり仕入勘定の性格はフローの勘定か、ストックの勘定か、理論的にはそこまでいくのよ。売上高・売上原価表示法だったら、何も問題ない。だからこれは、茂木先生が随分悩んでたみたいですよ。明治大にいたときに寫村先生と、大分論争めいた議論があったというのは後から聞いたことがあるけどね。それはこれに書いていたと思う。

次は大陸式と英米式ね、帳簿組織の1つの問題だけど、一般に帳簿組織が大好きな人は余りいないな。僕も。われわれずっと英米式でやってるでしょ。大学入試センター試験などでもあんまり大陸式なんか見たことないしね。繰越試算表だからね、みんな英米式だよ、前提としては。だから、人によったら、あんまり本質的じゃないって言うんだけども。問題は残高勘定でしょ。(大陸式では)残高勘定も、元帳につくってそして振替やっていく。一番、厳密は厳密よね。継続性がきちっとしてるんだから、期首、期末の間が。それは面倒くさいというので、ある種の簡便だといって、英米式がくるわけでしょ、大体そう書いてあるよね。

で、それを僕に聞いて何を、これから何を引き出そうかなと思っているのかな。まあ勉強せえ、というならしますけどね。その辺は、僕から引き出すとしても無理でしょうね、僕、何も勉強してないから。

和田 (笑)ありがとうございます。私も何年か簿記の授業を担当してきましたが、「僕は、大陸式の決算法のほうがすっきりする」という学生が、ごくまれに現れます。

石川 問題は、どういう意味ですっきりするか、だな。

和田 ええ。「仕訳で全部、残高勘定に振り替えるという、そのかたちが、どうも僕的にはすっきりするんです」という学生が、ごくまれにいたりするもので。

石川 いいじゃないですか。

和田 はい、大変私も、いいと思います、そういう学生は。

石川 でも、それを一般化するのは、どうかなって気はするよね。ただ一般化して議論するなら、一般化するような土俵をつくって、議論しないとイケないわけよ。英米式と大陸式の問題は。

#### 6) 財務諸表と帳簿の関係についてーキャッシュフロー計算書と帳簿記録

和田 はい。ありがとうございました。続きまして、財務諸表と帳簿の関係について、特にキャッシュフロー計算書(C/F)を間接法で作成する場合ですと、帳簿というものが、キャッシュフローの帳簿は必要ないという意見が多いかと思うのですが、先生のお考えとしては、キャッシュフロー計算書を作成するためにも、帳簿記録は必要とお考えでしょうか。

石川 キャッシュフロー計算書をどういうふう位置づけるかに関わるね。やっぱりプライマリーな、基本財務諸表としてのキャッシュフロー計算書ということであれば、つまりB/SとP/LとC/Fというのが三本柱だと。C/FがB/SとP/Lからなにか派生的につくられるんだと、間接法がそうだけど、直接法でもそうですよ。それ基本財務諸表ですか？というわけですよ。

基本という意味合い、プライマリーなステートメントだという意味合いが、どこにあるかといったら、やっぱりそうでしょ。記録から誘導されて、最終的に財務諸表がつけられる。それがB/SとP/Lから、既存の2つの財務諸表から導かれる、というわけですよ。そういうとらえ方をしたら、そのキャッシュフロー計算書というものの位置づけは、もうその意味において、つまり簿記本来の一連の手続きから見たら、それ固有の誘導から出てくるものじゃないわけです。それを基本財務諸表の1つだと、言えるのかどうかということですよ。

だから基本財務諸表としてのその要件、条件は何かということ議論しないと話にならない。僕はやっぱりそれは、何らかの帳簿組織だと。端的に言えば、勘定組織が必要だろうというわけです。そうしたら、どうしても3勘定系統になるわけです。資本と利益とキャッシュ。資本というのは、B/Sとなるんだけどね。そうしたら、どういうことが起きる

か、これは僕の話、こっちの話になるんだけど、それは直接法というものの位置づけの問題に関わってくるわけよ。本来の意味での直接法というもののね。それが歴史的には、名目勘定というものは損益計算以外に出たことないわけですからね。そうすると、面白い話がけっこう出てくる。で、そういう本来の直接法である取引仕訳というか帳簿をつくるとなると、大体皆さんは、事務コストがなんだかんだと、必ず言われるわけよ。紙の時代の、赤のところ赤字で書くような時代じゃないでしょ(笑)。

和田 おっしゃるとおりです。

石川 だから、そういう問題じゃないと思う、本質的な問題は。そうじゃなくて、まさに勘定理論というか、簿記の理論としてどうなの？財務諸表論としてどうなの？というね。事務コストがどうのこうのというのは、本質的な問題じゃないでしょう。ですから、ここの質問でいけば、まず基本財務諸表の要件は何かっていうことをきちっと議論すべきであると。その要件の中に、きちんとした帳簿組織の中から導出されるもんだよと。それが基本財務諸表ですよと。

そういうふうに条件設定したら、間接法から出てくるようなかたちでのキャッシュフローステートメントというのは、第二義的財務諸表ですよ、と言わざるを得ないですよ。第一義的、基本、プライマリーな財務諸表ではないんだと。そうすると、第一義的な財務諸表であるべきにはどうすればいいかって、自ずと答え出てくる。

橋本 そういう議論が、学会でもされませんね。そういう一義的か二義的か、帳簿組織とどう関連して、プライマリーな条件を、要するに導入するときには、直接法、間接法がある。で、間接法のほうが、先生おっしゃるように簡便だから、とりあえず導入することが目的になって、簿記会計上の位置づけを、ちゃんと決めずに、制度が先走ったようなところがあると思うんですけども、本当にこれは主要な財務諸表として位置づけを簿記のほうからできるのかというのが、われわれ聞きたかったことなんですけども。

石川 今のような経済のご時世ときは、やっぱり大事なのはキャッシュフローなのよ。キャッシュなんですよね、今日の日経新聞でも出てたでしょ。だから、利益も大事だけど、キャッシュが大事なんですよ。しかも、キャッシュフローステートメント、ちゃんと出してらるんだから。

橋本 出すならば、やはり先生が言っている、本来の意味の、直接。

石川 間接法では本当の計算できんからね。間接法のフローはうそのフローですから、あれは。そうでしょ、ネットだけ等しくてね。そういうことまで、きちんと教育せんといかん。だから僕は単式簿記というものを、まあ後から出てくるんだけど、複式簿記でないも

のとか、そういうような説明じゃなくて、もっときちんと単式簿記を。つまり僕が言いたいのは、間接法というのは単式簿記的思考なんですよ、実在勘定だけ。それは後でまたお話しすけど。

橋本 残念ながら、数年前に、スタディグループで研究会の皆さんに、アンケートとったときに、1番多い意見はやっぱり、どっちかという、複式簿記以外の簿記が単式簿記というような考えが結構、今の会計の学会で、主流的な考え方というか。

石川 3式簿記も単式簿記かと。

橋本 (一同笑い)そうなりますね。

石川 それはもうある種、非常にネガティブな説明で、もっとポジティブにきちっと説明しないとね。例えば僕のような見方すると、間接法っていうのは単式簿記的な発想ですよ、だって名目勘定ないんだから。でもやっぱりその、単式というもののある種の重要性っていうのが、あるんですよ。それは名目勘定の名目という意味合いをどうとらえるかにかかわる。後で議論するんだけど。「リアル」と「ノミナル」、ということの意味合いね。

## 7) 帳簿組織についてー記録の媒体と記録の方式

和田 はい、ありがとうございました。次の質問は、帳簿組織についての質問になってしまうんですけど(一同笑い)。

先生の展開表の動きを拝見しますと、元帳も仕訳帳も試算表も、すべて1つの表に収まるというようなかたちがありますので、少なくとも従来のような手書き形式の仕訳帳や元帳や試算表というものを区別する必要がないというか、XBRL等の議論でたまに見ますけれど、要は仕訳帳と元帳は、中身は同じ、並べ方が違うだけであると、そのように考えますと、先生としては、帳簿組織というものを重視されていないのではないかと。

石川 記録の媒体の違いによって、記録の方式も違って出てくるんですよ。だから普通に帳簿組織といったとき、紙の媒体、それに適合するモジュール形式だろうというふうに、ここにも書いてあるとおりね。仕訳帳、元帳、試算表などの各モジュール。だからある種の制約、つまり紙という媒体の制約に適合するという、この制約と適合という話、これが僕の関心事。

じゃあ、媒体が変わったらどうなるか、制約が変わってくるわけですから。だから展開表というのは、その意味では、仕訳帳も元帳も兼ねているわけだし、こちらの合計とっていったら試算表になってるわけですよ。それが、しかも磁気データでこうなっているわけですから、後でも触れますが、P/LとC/Fの記録計算の同型性からいったら、これテレビでデモンストレーションやって驚かれるんだけど、僕、オーストラリアでの講義でや

ったときもそうだったんだけど、磁気だからこそできるんで、紙では絶対できないよ。瞬間にP/LからC/Fに自動変換されるんです。もちろん逆もできるんだけど。あまりにも瞬間に、バーっといっちゃうのでね。つまり、P/Lの展開表で1行1行入力する、つまり仕訳すると、下のC/Fの展開表に自動的に移っていくわけ。だからスローモーションでやってくれと、放送大学での講義では。スローで逐一移っていくわけ。それは紙では絶対できないわけね。

ちなみに、帳簿組織というのはもっとも簿記的なところなのに、国家試験などでは出ない。だから、あまり教育もしない。教える側も苦手なところだしね。でも、特殊仕訳帳なんかもっとも簿記的だよ。記帳の管理や効率という点からしても。僕もあまり細かな点までいくと煩雑になって好きではないけど、重要でないとはまったく思っていないよ。特に、後でも触れますが、「情報」が圧倒的に優位な今の会計のあり方からして、「記録」の重要性はもっと強調したいですね。

#### 8) 教育上の工夫—本当の「学ぶ喜び」を

和田 ありがとうございます。では次の質問ですけれども、簿記教育にかかわるその他諸問題と教育上の工夫ということですが、先ほど、要は専門学校で教える簿記と、大学で教える簿記は、当然違ってなきやいけないというような先生のお考えは、よくわかりましたが、他に何かございましたら、お話しいただければと思います。

石川 これももう、やっぱり大学で教える簿記教育っていうのは、僕の考え方からすると、それは単に簿記固有の教育じゃなくて、僕は1つの素材だと思ってるんです。もちろん簿記を教えるんだけど、それも教育の1つの素材として。じゃあ、簿記を通して何を教えるのか、というわけよ。やっぱり考え方でしょ。思考のあり方っていうもの。

例えば先の三分法の話にあったんだけど、なんであれは期首と期末、ああなるのと。そうなるんだから、覚えよと。トレーニングやと、ラーニングじゃないんだと。習うより慣れよ、ちゅうわけやな。それもそうだろう、それはあるよ、確かに。でもそれじゃ、何の理屈もわかったらんわけだな。

理屈がわかると発展があるわけ、応用がきくわけです。売上原価の勘定、独立さすっていうの、やってみいとか。ちなみに言うと、そのとき期首と期末の商品だけでなく、あらためて仕入勘定（当期仕入額）の仕訳処理が理解度のチェックになる。これができれば、とたんにもとの三分法の正体が見えてくるわけね。そうなってくると簿記の教育、あるいは教育を受ける側が、この喜びがグッと性格変わっちゃうわけよ。パターン化された問題のトレーニングっていう話じゃないんだから。どんどん発展していく。それは実務にないものまでいくわけよ。

それはまた後の話になるんだけど。実務に存在しないものまで考えるわけよ。それを考えると、今度はその考えた実務にないものから、現に実務にあるものを見ちゃうでしょ。そこで瞬間的に実務の相対化が起きちゃうわけですよ。こういうことを教えないといけな

い。僕はそれは、駒大の学生でも、でもなんて言ったら失礼だけど、それが絶対できるんだという確信をもって、100人、200人いたら、10人でも20人でもいいから、そういうことをやっぱり考えていかないと、やっておられないわけだよ(一同笑い)。

要するに、まだトレーニングすらしないんだから、ましてラーニングまでいかんわけよ。だからトレーニング、トレーニングして獲得していく喜びと、ラーニングして、ラーニングして獲得していく喜びというのは違うんです。ですから検定簿記の話も一緒です。もう僕の言ったことで、想像つくと思いますけどね。

和田 はい。簿記を学ぶではなく、簿記を素材として、物の考え方を学ぶという。

石川 僕はすべて、もう、会計教育もすべてそういう観点です。僕の理想は、ここにも書いているんだけど、理論、歴史、そして教育、そのすべての「接合」というところを注意してほしいんです。バラバラじゃない、一体化して、うん。

橋本 そのときの先生、ごめんなさい、理論と歴史はわかるんですけども、例えば学問的体系、制度とかですね、このところの簿記っていうもんは、コミットするんですか。

石川 制度、会計基準か。

橋本 ええ。これはまた、後でしたほうが、いいかもしれませんけど。

石川 だから、それはまあIFRS偏重の今の教育のあり方、そういうのを見てると、よくわかるんじゃないかな。だからさっき僕、言ったよね、期末>期中だとか、情報>記録と。でも右辺側、つまり小さい方にきてるのは、全部、簿記と関係するわけよ。こっち左辺側、こちらがすべて今の会計なのよ。そう思いませんか？だからその象徴たるものとしては、何んで「情報開示が利益を生むか」と、僕は言ったんですよ。そうすると、制度の話でいくと、会計基準っていうものと複式簿記とが、どんどん離れちゃうわけよ。だから僕はそれが、情報の開示が記録・計算の領域に侵食していくんだと。開示優位だと。しかも記録ではなく情報ですよ。

話、もとに帰ると、教育のあり方、ここが一番、大事ですよ。だからトレーニングっていうのは役立ちばかりです。ラーニングっていうのは、本来的にそういう、すぐに役立つものじゃないんです。そういうものを大事にせんといかんと。だからレジュメ資料の補足の2)に、私が放送大学で「学ぶ喜び」ってことをあえて主張する、特に第1回でそれをお話しするんですけども、簿記も会計もビジネスのスキル、大学はそれを教育するんだと、スキル教育です。しかし、それは教育の1つの側面でしかないよと。役立ち、それもすぐに役立つ教育。しかし、逆に言えば、それは明日すぐに役立たなくなるね。

今の経済事情から、大学でのキャリア教育の必要性はわかりますよ。言い方は悪いけど、

大学が職業訓練校化しているわけ。専門学校化してどうなるの。職業教育と教養（リベラルアート）教育とは必ずしも両立しませんね。で、本当に役立つものっていうのは、やっぱり本当の「教養」というものと結びつくっていう話、これカギ括弧つきの教養ですけどね。大学で本来教えること、そして学ぶものは、ここです。簿記や会計の俗っぽい分野であってもね。

和田 はい、ありがとうございました。一応最後の質問として、今後の簿記会計教育に望むこととありますが、今までのお話で(一同笑い)、ほぼ。

石川 望むことを一言で言えと言われたら、やっぱり学生に与えられる「喜び」って、それは何かということですね。その「喜び」というものの、与える「喜び」の性格っていうかな、性質っていうものを、教える側が大げさに言えば真摯に考えないといけないじゃないでしょうか、っていうことです。

僕は、さっきも言ったとおり、「相対化の力」といったものを本当に実感したら、学生の喜びっていうのは、3級や2級の喜びとは全然違ったものになってくる。それは別に簿記会計に限らないですよ。僕はそういうふうにして、駒大の学生にも言ってるんだけど、そういう教育観を持たない教壇に立っていても士気というのかな、それが働かないんですよ。教える側に士気や情熱なくして、学生にどうして感動させられるか、です。問題は、その情熱の性質、受ける側の感動の性質がどういうものか、ということですね。人の考え方によって違うでしょうけど、まあ1時間ぐらい義務だから検定簿記やりゃいいと、僕はそれやったら、疲れて疲れて駄目。感動もない。まあそういうことですね。

和田 はい。ありがとうございました。

(了)

## Ⅱ 個別質問項目

和田 それでは、後半の個別質問項目へと進めていきたいと思います。石川先生からは、事前に資料をいただきまして、大変助かっております。ありがとうございました。一応いただいた資料に即するようなかたちで、私のほうで質問していきたいと思いますので、特にこの質問にとらわれることなく自由にお話していただければというふうに、私としては思っております。

石川 こんなにたくさん書いていたかな。で、関連文献で下線を引いたものは、今回のインタビューを受けるのに、少なくとも参考になるかなと。でも大変でしょ、これチェックするの。あくまでも参考資料として。

和田 読んでまいりましたので(笑)。

石川 すごいね。

### 1) 複式簿記とは一故安平先生の遺言

和田 最初の質問からさせていただきたいのですけれども、先生がお考えになっておられます複式簿記というもの、つまり先生はどのように複式簿記というものをとらえておられるのか、特に単式簿記との対比の中で、その特徴なりを、まずはお話しいただければと思います。よろしく願いいたします。

石川 事前にお渡したレジュメ資料に0)とふっているところですが、安平先生の「遺言」ですね。2004年5月です。冒頭で、「ある意味で、遺言のつもりでお聞きになっていただきたいと思います」と言われて、終わりにというところで、もう一度、「一つ遺言のつもりで記憶にとどめておいていただきたい。」と。つまり、冒頭と最後で、遺言のつもりだと言われているんです。現にこの後、これが2004年の5月ですから、2年後に亡くなられた。本当に残念無念の思いです。

その遺言の意味合いというのが重要です。われわれは若いメンバーはじめ、この安平先生の「遺言」と言われたその意味合いを理解することが、私は大事だろうと思うんです。それで、そのことを書いたのが、文献の⑥（「資金計算書の歴史的展開と数学的展開」2007年）。その最後のところで、私は安平先生とは親しくさせていただきましたので、この拙稿は安平先生の遺言への鎮魂を込めた一つのレポートだ、こういうふうに書きました。

そこで、私が「安平問題」と名づけたこの大きな宿題、それは何か。いくつか重要な点がふれられていますが、端的にはそこに書いているんですが、複式簿記の見方、複式簿記観ってものの安平先生の考え方、そして安平先生の考え方とは異なる考え方、これを安平先生にもっと長生きしていただいていたら、おそらくそこはやっていただけたと思うんですが、遺言というかたちで言われたので、まさに遺言として残ってしまったんです。

じゃあ、安平先生の考え方というのは、複式簿記の見方は何かというと、こういうふうには言っているんです。「何らかの人工の加わった記録・計算の道具」だと。これを私は端的に、「人工的弾力的道具観」と呼びました。さらに「その弾力性に何を盛り込んでいくかということが、やはり、その時代時代の要請に応じた簿記の記録の仕方ではないか」、こういうふうには言われています。それから、それとの対比において、こういうふうにも言われています。「笠井説と私の説との基本的な差は、複式簿記が企業資本の秩序の自然の表現であるか、それとも、人工の加わった記録・計算道具か」と。この遺言のなかでも重要な点から始めると、比較的、わかりやすいと思うんですね。

余談ですけど2年前になるかな、橋本さんからインタビューの話があったときに、僕はすぐにメモを書いたのは、ここから議論をはじめたら面白くなるということですね。ところが安平先生のこの遺言、その重要性にあまり気付いていない人が多いんじゃないかな、と

いう気がするんです。だから、僕はこれをもっと読んでもらいたい。

で、弾力性というのは、柔軟性とかフレキシビリティということで、私は安平説に立つと、複式簿記のどういうことがわかり、どういうふうなフレキシビリティ、弾力性、時代時代の要請を盛り込んでいけるのかということをもっと追求してみたかったです。で、かたや、笠井説と書いていますが、これは「自然の秩序」と書いている。つまり「秩序」と「人工」が対比されているわけです。自然の秩序って何んだ、自然とは何んだ、というわけです。結局、資本の、個別資本の、企業資本の運動です、そうはっきり書いています。これは、日本固有の理論ですね。個別資本の、企業資本の運動をとらえるのが複式簿記の記録計算だと。これはさっきも少し言ったけれども、中西、木村、馬場、それから慶応の山根、笠井と、こういう1つの系譜というか流れになる。こういうのを全部書いてみたい気持ちがあるんだけど、そういう全体図を系図みたいなやつだな。つまり、もうちょっと言うと、進化のツリーが、どっからどういうふうに分かれて、どうなったのか、という。学説史の進化論的な、生物の進化史みたいな、ああいう全体史を書く面白いなど。とにかく全体を見て、今はどうなんだという、俯瞰ということですよ。俯瞰、バードビュー。

## 2) 日本固有の議論—企業資本運動説と試算表等式の意味

で、それと、これは日本の固有の理論だから、非常に魅力ある。僕が魅力感じたのは、実は木村説なんです。木村先生の発想というのは、この文献でいけば、①（「試算表等式論覚書(1)」1993年）、ないし②（「試算表等式論覚書(2)」1993年）に書いているんだけど、僕は、安平説、木村説、山根・笠井説、これらの説を対比して、それぞれ「組込」論、「転化」論、「分化」論、こういうふうなかたち対比してとらえた。詳しくは読んでほしいんだけど。

端的には、文献②の10ページ、文献②というのは随分古いんで、もしお持ちならそこに書いてある。木村説の展開がなんでそんなに魅力あるんですか、と言われたら、僕はこう答えるな。ある種、非常に難解なんだけど、木村説はまさに弁証法的な、要するに対立と統一という、つまり、それまでの勘定理論、勘定学説を止揚するという発想ですよ。どういうふうに分揚したのかというところが、極めて面白いんです。そこはぜひ勉強してほしいんですが、手っ取り早くは僕のやつを読んでもらえば、わかりやすく書いているから。

簡単にいいますと、じゃあ従来の勘定理論、あるいは勘定学説って何かというと、1つは資本勘定学説です。これはいろんな人、ベルリーナ、ヒューグリ、シェア、ペイトンまで入ってくるんですけどね。それからもう一つは、損益勘定学説、これはワルフ、スガンチーニ、レーマンと、こういうふうに分類するんです。そしてこの2つの従来の説を、これ全部外国なんだけど、これを止揚するという発想です。どういうふうに分揚したのか、それは資本と損益の対立の統一。で、対立というのは、比較的わかりやすいんだと思う。資本勘定学説と損益勘定学説と分かれているんだけど、問題はどうか統一するんです。統一したら、どういうことがわかるかといったら、それぞれが統一した後の姿から、それぞれ

の側面しか見ていない、こうなっていくわけです。

そうすると、損益と資本の見地をどう統合するかですよ。これが、僕は非常に魅力的で、これが後の、山柘・笠井説と違うところなんです。動的転化論、それを端的にあらわしている言葉は、すべての勘定は資本の勘定であると同時に損益の勘定だという。これ難解なんだな。仏教的にいうと、「生はすなわち死である」というような言い方に近いな。「即」っていうね、イコールじゃないんですね、「即」というのは。これは余談ですけどね。

こんな図を解説して（文献①の57ページ）、残高試算表が2つ示されるわけです。だから立体で表さないといけない、対立と統一という。そうすると、従来の学説が、統一した後の姿から見たらこうなるよというか、位置づけ、相対化されちゃったわけですね。その後、どういうふうにつながっていくかという、山柘・笠井説と。そうするとその転化論じゃないんです。合計試算表まで、試算表等式ですから。そのあとに、P/L、B/Sに分化していく。この試算表を中心に。ところが、同じ試算表の見方でも、木村説はその試算表の分化じゃなくて、そこ自体に資本と損益の見地が、すべての勘定、資本の勘定と同時に損益の勘定だと言っている。聞きようによっては、ごまかしじゃないの、と思うような（一同笑い）そうでしょ？「生きていることは死んでる」と言っているんだから、生きてるやないのって、ね？木村が言うからさ、深遠に聞こえるわな。僕が言ったら、ごまかしだよ、違う？

僕が言いたいのは、木村説の魅力がどこにあるのか、ということももちろんだけれども、やっぱり安平先生の遺言というものを、スタートにして考えていくと、どういうことが発展的に出てくるかっていう。僕は、やっぱり木村説に非常にアトラクティブな側面を見たから、当然そっちのほうをやってみたかった、もっと。僕の言っている「算法的」に対して、「実質的」試算表等式というかたちで。

安平先生のお話はその直後から、急に僕の話になってくるんだ。「それから大阪市大の石川さんの書物を…」とか。非常にありがたいんだけど。ここに、私、何年かぶりに読んだんだけど、こう言われているんだな、「石川さん自体が、実体・名目2勘定系統説を主張されている、賛同されているというわけではありません。しかし、それをベースにして、複式簿記の構造というものを考えています」。僕は、まさにそうなんです。だから別に、木村理論の流れのほうで、やってみてもよかったんです。魅力あるから。でも、山柘・笠井説がものすごい理論展開されたから、これはもう僕がやることはないなと（笑）。ただ、笠井理論は相当勉強しましたけど。

僕はまさに、安平理論をベースにしたら、どういうことが見えてくるかと、もう少しいうと、複式簿記が本来的に持っている構造というものを明らかにしてみたい、そういうこと考えたんです。したがって、ここでレジュメ資料にも書いているように、キーワードは「人工と自然」、それから弾力性、柔軟性、フレキシビリティ。これが後々、単式簿記の扱い、その位置の話、キャッシュフローの話、それから複式簿記とは何でありうるか、という話に、全部つながる。

僕は、残高勘定と損益勘定が、あとじゃなくて最初から組み込まれているんだと、そう

いう見方をしたんです。安平説を。だから、はじめに残高勘定ありき、損益勘定ありき。笠井説での「分化」というのは、残高試算表からあとで抜き取られていくんです。最初から残高勘定、損益勘定があるんじゃないんです。ちなみに、木村説は資本と損益の関係が対立と統一の関係、だから立体的に書かないと説明がつかないわけです。

つまり、木村説からさらにさかのぼる、日本の古典理論とも言われる、いわゆる個別資本説、あるいは個別資本運動説。G—W—G'という、「うわーなんじゃ、遺物だ」と。もう役に立たない遺物だと言われる。G—W—G'と書くだけでね。そうでしょうかね。企業資本の運動をとらえるんだというね、それは中西説から始まるわけです。だから日本の固有の勘定理論でしょう。その発展というのは魅力がある。その中に位置している木村理論というのは、どういうことをやってるんだと。僕は、やっぱり安平先生のやられた実体・名目2勘定説というものの、あの弾力性とか、人工性、サイモンが言っているのと非常によく似ている。脚注に書いてあるんだけど。そういう複式簿記の見方からやれば、どういふことが見えてくるんだらうと。結局、それは後々触れますけれども、キャッシュフロー計算の話にも。そのことは、安平先生の遺言の中で、少し触れられてますね。

どうぞ、質問。もっと先行く？僕が1人でしゃべってるんじゃないの？

### 3) 複式簿記の弾力性—歴史と理論

和田 特に安平先生の遺言の中では、この複式簿記の弾力性というところ、そこが一番重要と先生はお考えなのだろうなと思いました。

では、

石川 これはかなり読み込まないと。では、レジュメの1)に移っていいかな、キャッシュフロー計算の複式簿記は考えられるかというところ、私はわかりやすく、Yesの簿記観と、Noの簿記観と。おそらくNoの簿記観、個別資本の運動説だってそうなると思う、キャッシュフロー計算なんかないと。複式簿記というのは、損益計算なのだと。資本利益計算ね。つまり、資本と損益をどう複式簿記の中で、あるいは馬場理論ではストックとフローの関係というんだけど、そういう議論をずっと日本はやってきてたんです。で、ある種の到達点かどうかはさておき、また純然たる個別資本の運動説の流れかどうかはさておいても、山根・笠井理論まできている。

で、安平説に立つと、Yesの簿記観になるだろうと僕は思う。その1つのカギは、単式簿記をどうとらえるかですよ。逆に言えば、Noの簿記観では、単式簿記ってのはどうなるんだらうと。試算表等式論、試算表でやる以上は単式簿記じゃないんです、複式簿記が前提だから。収益費用の勘定抜きにして試算表は成り立たないから、簡単にいうと。でも、安平説は、単式簿記の位置づけっていうのは、最初の話になるんだけど、複式簿記以外のものって言うと、そんなの説明になってないから。だから、僕はやっぱり、コジオール、組織的単式簿記といわれたあれですね、つまり実体あるいは実在勘定のみ、しかもそれで損益計算できると。今風に言えば、貸借対照表で純資産の2期間比較でやるというね。つまり、それが組織的ということの意味。それがスイスのケーファーにきて、で、日本の

安平にいくという、このまた流れね。面白いね、そういう流れ。

ですから、自分はどの立場で議論するかという、それはもう決めうちしないといけない。で、僕は単式簿記っていうものの位置、重要性を、安平説からくみ取るわけです。で、後々、それが実は、C/Fでの間接法の構造と同じだなと気づく。だからP/Lの財産法とC/Fの間接法というのは兄弟だと、構造を見れば同型だと。そうすると、名目勘定の方はどうなんだと、これもきっと同型だろうと。つまり、収益費用と同じように収支勘定を設定する、先ほどのあれだね、帳簿組織が必要か、当然必要なんです、3勘定系統だから。で、後で僕はそれを全部統合するような話をするんですけど。だから3つというのは、資本と利益とキャッシュ、この3つが基本だと、こうなるわけです。そして、それが基本だという理論が必要になるんです。

和田 はい。それでは、複式簿記の弾力性というものを前提としますと、当然、損益計算以外の複式簿記というのもありえるということで、先生はキャッシュフローの複式簿記というものをとお考えになられたのかと思います。そうしますと、新たな名目勘定として、収入・支出勘定というものが出てくることになるわけですが、やはり、われわれのように、どうも名目勘定というと、収益・費用勘定しかないというふうな考えを、長いこと、持っていた人間にとっては、新たな名目勘定の登場というのは、非常に新鮮に映るわけなのですけれども。

石川 新鮮に映るかどうか、とんでもないと思うか、それは意見が分かれるでしょうね。おそらく、とんでもないと思う人が多いと思います。それはやっぱり弾力性とか、あるいは安平理論というものを、どういうふうに見るか、解釈するかによるんですね。

橋本 新しい勘定を入れる、その歴史と関わる場所ですけども、僕らヒストリアンからしますと、その社会経済的な要請っていうものを汲んで、そういうものが入ってくる、そういう場合、今そういう状況っていうか、そういうものを必要性というものを、先生はやっぱりこの現実の世界からの、感じて。

石川 もちろん単なるその形式科学とか、あるいは計算構造とか、そこにとどまるんじゃないくて、やっぱり時代時代の要請というものが、まさに弾力性というのは、そこに意味があるわけですよ。社会的要請とかね。そうすると、キャッシュフロー計算書が、間接法で既存のB/SとP/Lから、まあ2期間のB/Sからですけども、作成されるとなると、端的にいうと、グロスのフローが、うそのフローになっちゃうわけです。作られたフロー、うそのフローですよ。そうすると、原因別計算が遂行できない。これはあたかも単式簿記のように、実在勘定だけで利益が計算できても、原因別計算ができないことと同じじゃないか（純財産の差額計算を間接法のように資産・負債の増減の形で示せば、やはりフローがうそになる）。じゃあ、やりましょうと。新たな勘定科目を設定するわけです。

P/Lでの原因別計算を担うのが、まさに損益勘定ですよ。そしてそのことによって、2面計算として、結果だけでなく、その原因の証明記録になるわけです。これは単なる計算科学じゃなくて、社会的要請、あるいはそれぞれの時代的条件というものが背景にある。

これと同じことで、キャッシュフロー計算だって。特に最初に少し言ったように、今、利益よりもキャッシュフローが大事、こういうご時勢だから。つまり、継続企業ということ自体が危ない時代になっているわけでしょう。で、キャッシュが非常に重要になりますよね。しかも利益といえども、そもそもキャッシュフローというものから離れて存在するものではないわけですから。

ですから、歴史と理論との兼ね合いで、文献⑥（「資金計算書の歴史的展開と数学的展開」2007年）ですけれど、後で出てきますけれども、渡辺(泉)先生が示された資金計算書の歴史的展開の中に、実は数学的展開との照応関係がある、というのを僕なりに見つけるわけです。その見つけ方の源泉がどこにあるのかってところは、自分自身に問いかけてくると、それが文献⑧（「構造としての会計科学」1983年）あたりに。これは最初挙げるつもりはなかったんだけど、やっぱり大事だなと。もう何年前ですか、1983年ですから30年前でしょう。だから若い人たちに僕が言えることは、こうだと思っただな、つまり、30才代そこそこのときに考えたことってというのは大事なんだよと。僕、この年になって、あらためて読んだら、あー、俺はこういうことを考えてたんだと。で、今、僕がやったことは、こういうことと、密接につながっているんです。そのつながり、面白いね。

ですから、話もとに戻して、キャッシュフロー計算というものに原因別計算というものの要請が働いてくれば、間接法ではそれに応えられなくなるわけです。じゃあ、ちょうど損益の原因別計算が歴史的に出てくるんですが、キャッシュフロー計算ではそれがありませんよ、名目勘定っていうのは損益勘定しかない、出現していない。ですから、僕は、何を例に持ってきたら、わかりやすいかなと思って、つまり、数学的な構造的な論理と社会科学的な展開の接合というときに、こういうもので説明したらわかりやすいかなっていうので、例えば分子構造、高校のとき習うでしょ。メンデレーエフの「周期表」よ。文献⑥の14ページだな。こういうような発想をするわけ。未発見の元素を予測できるわけ、サイエンスというのは。で、実際その元素はあとで出てくるんですよ。だから何も自然科学の中だけじゃない、予見の手がかりというのは、そんなことを思うわけ。でも、変わるの形態の方、その基礎にある構造は同じなんです。ストラクチャー、同じなんです。こういうこと、どんどんやっていくと、それはまた、方法のところでお話しましょうか、レジュメの5)のね。はい。

和田 時代の要請に従いまして、名目勘定というものは、収益・費用だけに限られるわけではない、収入・支出勘定も出てくるということで、キャッシュフロー計算書というものを作成する複式簿記の構造というものが、ありうると。そうしますと、現在、キャッシュフロー計算書に加えて株主資本等変動計算書という財務諸表も制度化されているわけですが、その株主資本等変動計算書を作成するような新たな名目勘定とか勘定体系というものの、

それもやはり想定できるということになりますでしょうか。

石川 どうなんかな。持分というのは資本、一般に持分の変動計算書っていうのは、本来は損益計算書が担う。違う？持分の変動は損益だから。じゃ、なんでいまさら持分変動計算書が入ってくるかっていうと、例えばアメリカ的あるいは日本的に言えば、純利益でないものが出てきた、「その他の包括利益」みたいなものがどんどん入ってきた、それから自己株式やなんだ、そうでしょ？それは違うものだよ。つまり今日的な表現で言えば、資産・負債アプローチとか、公正価値会計というのが出てきて、そこら辺の何ていうのか、つじつまあわせで、純利益計算でない、変な「利益」の行き場。

でもどうなんだろう、日本のB/Sの貸方から見れば、あれは純資産だけれども、株主資本じゃないとなってくるからさ。除かれるだろ？そうすると、主体論とかそういうもの全部つながってくるんですよ。主体論が変わると持分概念が変わって、持分の変動って、何を持分の増減と考えるかも変わってくるわけでしょ。だから親会社説に立つから、これ連結の話になってるね。簿記の話じゃなくてね(笑)。主体論って、復活してもっとやらないといけないわけね。古典的な議論はもっと、どんどんやらないといけないですよ。IFRSばかりじゃ賢くならないよ、学生には、いつもそう言ってるんだけど。ところで、連結っていうのはそもそも財務諸表？という話も(一同笑い)。あれは投資情報だろう。

橋本 財務諸表、財務報告書ですね。

石川 連結は証券市場での取引法(市場法)がベースなんだから、会社法での計算書類なのかっていう、そういう見方や議論あってもいいと思うんだよ。

先の話に戻ると、持分の変動原因、しかしそれネットでしょう。「その他の包括利益」は利益といいながら、むしろ純利益でないから。じゃなくて、もっと原因別の説明が必要だよとなったら、資金なら資金の変動もそうだし、形式論理的に言えば、あらゆる勘定のそういうフローの原因別計算が可能と思うんです。何もキャッシュに限らず。歴史的には、資金計算書の流れをたどっていったら、資金の概念が変わってくるわけです。今はキャッシュになってキャッシュフロー、しかも一番狭い、現ナマ、プラス有価証券の短期的なやつでしょ。でもそういう意味を捨象しても、要するに何かの増減を説明するもの、そこが持分というものであれば、持分の変動というものの、しかも原因別計算というものを財務諸表で出せとなってくると、当然そういうものが出てくるわけですよ、理屈では。

和田 はい。ありがとうございます。

石川 ただ後で、少し言わないといけないと思うのは、そういう形式論理的な、すべての論理的可能性の話と、これは歴史というものの洞察が大事なんだけれども、だから僕はキャッシュと利益と資本という、この3つが基本なんだよ、重要だよと。

キャッシュフロー計算でこういうことが説明できたんだから、他の勘定科目、例えば売上債権で原因別計算やりましょう、あ、できますよ。こういうこと、僕は言ったこともあるんだけどね。実際、そういうものを井尻先生といっしょにやったんです(文献⑤)。でも、その話と、キャッシュというものと資本および利益というもののつながりというものは、単なる形式論理じゃなくて、これ歴史的にも、あるいは現実社会の経済的意味というか、そういうものがやっぱりあるだろうと。そこでレジュメの補足1)で書いたのは、そこなんよ。こういうことは面白いんよ。何が面白いかという、歴史と理論、その理論も、何らかのかたちで数学的な構造というものを持っている、これとの照応ですね。後で触れてみたいですけど。それでいいですか、じゃあ2番の質問にしてください。

#### 4) 収益費用勘定の性格、名目勘定性の意味

和田 収益費用勘定の性格、名目勘定性の意味に関して。

石川 はい。これは、結局、レジュメの1)の話ですが、これは皆さんもご存じだと思うんですけど、いろんな勘定学説が出てくるんですが、結局じゃあ1つだけ、何が異なって、それぞれ異なる勘定学説になるのかという、1つだけ挙げよと言われてたら、収益費用勘定の位置づけが違うと。

例えば、B/S等式でも資本等式でも、全部、資本の下位勘定、収益費用勘定は。それから、木村理論は、先にも言ったけど、資本と収益費用というものは、同時であり転化していくんだというところ。それから山根・笠井理論は、試算表の左と右だから、左側の費用というのは資産と同格だと。右側の収益というのは資本と同格だと、あるいは負債も含めて。しかし、それぞれ同格なものがどうやって差し引きできるんですか、安平先生からの1つの批判だよね。それは、試算表から残高勘定と損益勘定が分化するときに起こる問題で、「分化」論だと僕は書いた。そのときに同格性が、別格性というかたちでガラッと変わるという、そういう論理展開なんです。面白いな、と思うんですけど。違うでしょ、木村説と全然。木村説はそのまま、動的に対立してる、つまり左と右が対立していて統一、と言っているんだから。僕が言ったら、もう絶対ごまかしだと言われるよ(一同笑い)。木村先生という大先生が言うからさ、すごいわけ。

それで、だから費用収益勘定の性格っていうのが、重要な学説史の違い、勘定理論の違いを生んでいるということです。それ1つ言えると思います。文献③(「企業会計システムの簿記論的基礎とその展開」1996年)で、これは安平先生の本の『会計システム論研究序説』について書いた論文の中にあるんですが、1つだけなかなか気がつかないと思うんですけども、名目勘定っていうものの性格、収益費用勘定の性格です。どういうふうに皆さん思います?

和田 名目勘定というと、決算のとき、締め切りのまえに振替というものが行われて、最終的に実在勘定へと戻っていくというような性格があるので、私としては、どちらかとい

うと、名目勘定というのは、まさに収益費用の場合であれば、資本勘定の低位従属勘定かなというような理解でございました。

石川 よくよく、その安平説を見ると、僕が面白いと思うのは、それは端的にいうと、僕はこういうふうに数学的に書いたんです。この文献③、黒板で説明してもいいんだけど。これはどういうことを僕が説明してるかという、安平説の真意って、どこにあるかっていうこと、名目勘定の意味。特に反対記帳性っていうやつね。反対記帳性というのは、どういう意味かというわけです。それは、コジオールのは実在勘定だけで1つの完結した組織的単式簿記なんだから、だから複式簿記から見たら2面計算が1面計算になってるから不完全なんだけれども、でもそれは複式簿記から見るからであって、単式簿記の中で見ると1つの完結した1つのあり方なのよ。実在勘定だけの閉じた簿記。そこに名目勘定が入ってくるわけです。で、名目勘定が入ることによって、個々の取引仕訳は確かにすべて複記になるわけです。単式簿記の段階でも、いわゆる交換取引っていうのは、複式記入なんですよね、それはそうでしょう、だって実在勘定のプラス・マイナスだから。だから一方的増加、一方的減少のときに困るわけよ。

こういう実物の集合（資産・負債・資本）の円があったときに、円の中のプラス・マイナスというのは、円そのものは何も変わらないんだけど、こっからポンと飛び出して、入ったり出たりするときに、全体が崩れちゃうわけですね。つまりそれは、資本が増えるか減るかという話なんだけど。

そういう損益取引の場合は、貸借のどちらかの相手勘定がない、つまりブランクになっちゃうわけよ、もし複式記入ですればね。じゃあ、そこに反対勘定入れましょう、というわけ。それはコジオール、ケーファー、安平先生になってくる。そうすると反対に記帳するっていう話ですよ、まさに「名目」、実体じゃないですね。だから名目というのは文字通り名目的な、安平説では。ということの意味がどこにあるかっていうわけよ。それは、やはり、リアリティーのあるものは、実体勘定だということでしょう。利益もそうかどうかにならないですか。

ですから、僕はこの図で、つまり（左の円の）実体のなかでの収益と費用と、（右の円の）名目勘定としての収益勘定と費用勘定とを区別するっていうところの意味合いをしっかりつかまえてかないと、安平説の真意はなかなか伝わらないんじゃないかなと思うんですけどね。その意味で、名目勘定性というものの重要性ですよ。その前に僕が言ったのは、安平説にいく前の話、収益費用勘定の位置づけ。で、収益と収益勘定、費用と費用勘定の違いなんて言ってるのは、僕の知る限り、安平説しかない。

だから、簡単に言うとね、そこにお持ちじゃないかもしれないから言うと、こうなってるわけよ、こうなって（離席して板書している様子）。僕は、こういうふう書いた意味は、（左の円を説明しながら）これが資産・負債とかね、これがRと、これがR-Eなんだけどね、実はこれが、これ離れてるのよ（2つの円が重なる部分を立体的に見る）。で、リアルなものっていうのはこうあって。だから、Rと（右の円の）RのウェーブRで区別した

んですよね。お持ちの方は読めばわかると思う。だから（左の円の） $\Delta K$ と、つまり利益なんだけど、（右の円の） $\Delta K$ のウェーブ $\Delta K$ 。そういう形で僕は説明しましたけどね。だから実体勘定で、何か資産Aが出ていったり入ったりする、実体としての収益Rと費用Eね（左の円）、そのことと反対記帳である勘定、名目勘定、収益勘定と費用勘定（右の円）は違うんだと。違うんだということは、結局、実体の増減としての利益はこっちのウェーブの付かない $\Delta K$ 。

名目勘定から名目勘定を引く、収益から費用を引いたら名目じゃないの？という人もいるかもしれないね。でも、バランスシートの資本にストックしてあるんだから、その点で言えば実在だよ。だから僕は注意して、（実在勘定と言わずに）B/S 勘定項目というんですよ。そういうことを注意して、他方のP/L 勘定項目と。だから、もっと一般的にいうと、ストック勘定とフロー勘定。

## 5) 複式簿記の2面性をめぐって一取引かシステムか

橋本 2面的な性格あるということで、中性的って意味ですか。

石川 わからん。でもそれは、安平先生も考えてたんじゃないかな。僕は累積利益という言葉を使うんだけど、累積という以上はストック。で、「振替」の性格ね、名目勘定の差額であることは間違いない。それが資本にいくと、名目勘定の差額が、なんで実体に行くのかっていう疑問もあるのかもしれないな。

でも、キャッシュフロー見てみよ。キャッシュフローならわかるのかな。キャッシュフローだと、インフローとアウトフローの収支差額（収支勘定が説明している本体は実在としてのキャッシュ）を現金の期首残高にもっていくわけだ。キャッシュという現ナマだから、これは問題ないというわけよね。実在勘定だと。問題は資本だというわけよ。

石原 例えば、その費用収益使わなくても、先生も書かれていると思いますけど、どうも複式が完成しないときの、相手をすべて、累積利益でもなんでもいいですけど、ストック勘定を持ってきてやっても、複式簿記はできるんで。

竹中 それを複式と呼ぶのかどうかでしょうね。

石川 だからそれは、単式簿記の段階で複記やろうとしたら、相手勘定は損益取引だから資本だろう、というわけですよ。資本、ね。

石原 原因をわからせることが複式簿記の本質であるということであれば、それじゃ駄目だろうと思うんです。

石川 だから、単式簿記の段階で複式記入するなら、と言ったわけよ。直接資本が相手勘

定、費用も資本、もちろん収益も資本なんよ。むしろ単式だから原因はわからない。そして、そしたら振替必要なくなるねっていうことを言うわけよ、僕は。また、それはもう、話がどんどん(一同笑い)。それで、石原さんが言いたいことを、ちょっと聞きたいんだけどね。

石原 ちらっと話したんですが、複式って、僕も歴史的に勉強してないんでわからないんですけど、なんで複式になったんだっていうのが。どうして単式簿記じゃ駄目だったんだろうっていうのが、いまだに、その原因がわからないことが、本当にそうだったのかなっていう。特に昨今の動きを見てたら、必ずしもそういう原因がわからなければっていうことが、複式簿記という、これだけ長く続くものを生み出す要因としてそんなに出たのかなっていうのが、ちょっとわからないなっていうところで。

石川 たとえば所有と経営が分離してない段階を考えると、複式までいかないっていうことはあるわけね。他人の金を預かってこそ、スチュワードシップというか、アカウントビリティという話になる。やっぱり顛末をきちんと説明せないかん、証明せないかん、というわけよ。全部もう自前でやってるなら、つまり報告する必要がないわ、報告を。

だから結局、そういう問題を考えていくことが重要であって、結局、歴史の中で見ていかないと。当たり前のことだな、ある日突然発見されたわけじゃないんだから、複式簿記っていうのは。商人の営みの中から生まれて、それから企業の形態がどんどん発展、変化していく中から発展していくものだから。だからこそ、簿記教育っていうときに、歴史的な視点というものを一切度外視して、それが受験簿記・検定簿記に役立つとあって、テクニカル偏重で、それを大学が3級程度まで教えればいってやるってこと自体が、なんで問題かっていうと、そういうところね。歴史は確かにすぐに役立たないよ、昔の話してるんだから、でも、それこそ一番役に立つ話じゃないのかと。単なる昔話というもんじゃないから。役に立つ、立たん、というなら、役に立つのはかなり先になるのよ。でも、それが本当に役に立つ、自分の血や肉になる、財産になるんですよと、いつも学生に言ってます。

石原 僕の持論として、すべての複式記録は単式に分解できると思ってるんですけど、特にコジオールなんか読んで、私も人伝いにしか聞いてないんですけど、コジオールって、実体勘定の動きだけで、最終、結局決算のときに、売り上げなら売り上げでもなんでもいいです、極端な話しすると、すべてお金が入ってきたら、前受金のようなかたちで実体勘定で処理をしておいて、決算のときに売り上げいくらあったか、じゃあこндаけ前受金あるけど、これだけは売り上げだねっていうようなかたちで分けるのが、コジオールの発想かなというふうに思うんですけど、それでいくと、別に例えば売り上げが100円ありました、単式で現金100円増加ってやって、売り上げというものも100円あるんだよっていうかたちで単式で認識していけば、それはもう、そのときの費用収益というのは、名目とは

言えないかもしれないんですけど、100円という収益というものが、今、出てきたんだよっていうかたちでも、単式記録っていうのは可能なんじゃないのかなというふうに思うんですけど。要はその、コジオール、自分は複式だといってないんで、あれですけど、その発想から、コジオール的な発想をすると、必ずしも費用収益勘定が名目であるという必然性もないかな。

石川 その複式簿記の話で1つのポイントは、これは僕が最初に強調することなんですけど、個々の取引仕訳の中での議論をするのか、システム全体の議論をするのかっていうところが、非常に大事な点で、普通、学生さんは、「複式簿記、あー、あの左右貸借ね」と、これ普通の感覚なんですよ。でもそれは、システム全体の2面性というものがあって、それが個々の取引仕訳の中に複記というかたちで現れてるんだと、そういう見方をすると、グッとまた変わってくるんだよな。だからその個々の取引仕訳のレベルの議論と、システム全体のレベルの議論かっていうことは、やっぱり踏まえていかないといかんことだろうと思います。まさに組織的単式簿記といってる、あの組織的ということですよ。

だから、石原さんが言ったことを僕なりに受け止めれば、もしすべての経済活動、取引は単式簿記で記録できるんだと言われたら、僕はシステムのほうから見るから、それはシステムが単式簿記なんだねと、そうすると1面計算だと、実在勘定による資本の増減計算、利益計算だと、それはそれでいいわけですよ。でも、それは1面計算という世界の中で完結してるだけの話だよな。どうかな。僕はそういうふうに思うんですけど。

石原 普通の人間の感覚でいうと、例えばお金が入ってきた。いわゆる交換取引でやれば、何か出ていくわけですよ。だからそれはそれで納得して終わりなんですけど、お金入ってきて、何も出ていってないぞっていうときは、普通の人間の感覚で、これ何のお金？っていうふうに思うじゃないですか。そこでもうポンと収益なら収益、負債でもいいんですけど、負債もかたちがないこと多いですから、そうやって認識しないかな、という。で、その記録として2面同時記録しなくても、人の感覚として2面的になってないかなっていう。普通の人、全うな商売人であればですよ。お金がザカザカ入ってきて、何とも思わない人であれば別ですけど(一同笑い)。おおよそ商売してたら、自分がどのくらいの損したっていう。

石川 そういう個々の人間がそういう発想をすることは、その通りだけれども、それをシステムの中に自動的に組み込んでいくような仕組みを作るっていうところに意味がある。だから安平先生の「人工」ということの意味合いね。特に強調するのは、「自動的」ということと、それから「継続的」ということと、「組織的」という、この3つね。それは人間、1人ひとりがいくら違ってたって、同じね。

橋本 やっぱり歴史的には。

石川 システムですよ。

橋本 裁判の証拠になるっていうか、公証人の承認を受けなくても、みんなが見たらわかるシステムをつくらうっていうの、やっぱり。

石原 貸借複記するというのは、非常に人間行動として不自然な行動だと思うんですよ、僕からしたら。ああいうことをしようという発想自体が、まさに人工であって、あえてしようとしなければいけないでしょ、っていう。

橋本 やっぱり人工なんですよ。

石川 後でハイエクの含意というところに関わるんですけど、つまり「簿記は言語だ」というときの、言語というものの本質的なものから見ると、今言った話と関わるわけですよ。認識行為だから。後で、「釈明と簿記」という点でまた。

石原 自然発生はしないでしょうっていう、複式記録というのは。

石川 もちろんそうでしょう。

橋本 歴史的にも絶対そうだと思います。あと人工。

石川 だから商人の必要性から出てきているんだから、備忘記録から出てきているわけだから。

橋本 おそらく、違うかもしれませんが、この複式というものが、要するに、これは形式の問題ですよ。で、人工というのは、どっちかというと内容の問題だと思うんです。その最初の形式さえも、結構やっぱり人工的な要素で。

石原 それこそ、ズンマで、わざわざ数学書の中で複式が取り上げられるということ自体、この複式っていう計算構造がちょっと特殊ですよ、っていうことなんじゃないのかなというふうに思うんですけど。普通、皆さんが慣れ親しんでいる計算とはちょっと違いますよ、という意味で、数学書の中に取り上げられたんじゃないのかなというふうに思うんですけど。

橋本 ちょっと前、進みましょうか。

## 6) 3勘定系統についてー資本と利益とキャッシュ

和田 はい。では、レジュメ資料の3)の論点に進めていきたいと思います。キャッシュフロー計算を含む複式簿記というものと、損益計算の複式簿記というのが、統合されたかたちということで、その場合は、要は残高系統勘定と損益系統勘定と収支系統勘定が存在することになるかと思うのですが、その3勘定系統のことは、3式簿記とは言わないのでしょうか。

石川 うん。3式簿記とは言わない。違う。

和田 ご著書を拝見しますと、要は複式簿記が2つあるかたち。

石川 そうですね。

和田 というかたちの、ご説明だったかと思うのですが、その複式簿記が2つある状態と、3式簿記の違いっていうのは、どのあたりに。

石川 3式簿記っていうのは要するに、2式簿記が拡張されてるわけね。複式簿記が2層のかたちでつながっているっていうのは、全然違うわけですね。

2層になっている、2つの複式簿記、この図で書いてますね。そのことが、実は3勘定系統っていう話であって、3勘定系統だからすなわち3式簿記だとはならない。なぜかという、これ大事だけど、3式簿記っていうものの定義にも、どう定義するかによるんだけど、あくまでも複式簿記という構造そのものを拡張するんだと。つまり、 $X=Y$ から $X=Y=Z$ 、この基本3式が成立するような簿記を3式簿記と、そう定義するわけです。井尻先生の3式簿記がそれですね。ですから3面計算ですよ。

和田 3面計算。先生の言われる複式簿記の2面計算の場合ですと、残高計算と。

石川 残高勘定と損益勘定と収支勘定、つまり1つのストック勘定と2つのフロー勘定で、それぞれのストックとフロー、ストックとフローが複式簿記なんです。それは、最初は別々に論じるわけです。P/Lの複式簿記は皆さん知っているとおり。だから、C/Fの複式簿記をやってみる。だからこういうことが言えると。そして、両者をつなぐということが考えられないかというわけですね。それが2層重ねの概念枠組みです。あそこの展開表のかたちをしたものが、2つ重なっているところですね。重なっている共通のところは、B/Sのストック勘定ですよ。両端にきているところが、P/LとC/Fのそれぞれのフロー勘定が入るところです。振替先が、かたや資本（あるいは留保利益ないし累積利益）、こちらは現金だと、こういう仕組みを考えただけです。随分昔ですけど。つまり、P/Lの2面計算とC/Fの2面計算を2層の形でつないだわけです。

和田 それに関連して私が今回気になったところは、さらに当然、名目勘定を増やすことが、理屈上は可能なわけですから、それを増やしますと、その新しい展開表というのは、もしかしてもう、2次元平面に書けないのではないかと。

石川 (笑)例えば、じゃあ1つ何にしようかな、売掛金でもいいよね。

和田 そうすると、3次元的な(笑)。

石川 もうn次元なんでしょう。

和田 やっぱそういうことでよろしいのですね。

石川 それがその展開表として書けるとか、書けないかっていうのは、あんまり本質的な話ではなくて、n個のフロー勘定を設けるといことができますか、といったら、増減の原因を説明したいものがn個あるなら、n個のフロー勘定、理屈上はそうだよな。

和田 そうですね、それはやはり。

石川 そのことと、すべて組み込んだものをつくるっていう意味はまた別ですよな。そうすると、キャッシュと利益と資本というものを3勘定系統でやるということの意味ですね、最初に少し言ったんだけど、それは他の勘定をもってくるのとは違う、経済的、社会的に意味があると。例えば売掛金の増減計算とは違う、それは補助簿でいい。あるいは負債のほうの勘定も。でも、それはキャッシュとはその意味合いが違うだろうと。利益とキャッシュはつながっているからですよ。そうすると歴史の話にさかのぼらないといけない。多分、あとの議論にも出てくると思いますが。それが、また名目勘定の位置づけの話とも関わってくるんですね。

和田 はい。時間も少なくなってきましたので、少々駆け足で(笑)。

石川 大事なところが駆け足になったら困るけどな。

#### 7) 複式簿記のサイエンスという見方—見えない構造

和田 いただいた資料の4)の論点についてご質問させていただきたいと思いますが、先生は、この見えない複式簿記の構造というものを探るといことが、特に『複式簿記のサイエンス』というご著書の中でも一貫して主張されていたかと思うんですけど、先生の考えられる複式簿記の構造というものは、私の解釈では、要はストック計算とフロー計算を

2面的に行うという、それが複式簿記の構造であって、それにこの損益計算というものができたり、キャッシュフロー計算というものが時代の要請でできたということだったかと思うのですが、私のお伺いしたのは、そもそもこのストック計算とフロー計算というものを2面的に行う必要性というのは、どこにあるのかなと。もう少し言い方を変えますと、財産法や間接法というものの存在意義というのは、どのあたりにあるのかなという点、少々疑問に思うので、先生のお考えをお聞かせいただきたいと思うのですが。

石川 それは歴史に照らしてみれば、僕の専門じゃなく橋本さんなんだけれど。やっぱり結果計算というかな、例えば歴史的にはビランチオになるのかな、そこでの利益がどういう原因から生じたのかということ証明しないといけないと。それで、できあがった後の複式簿記の構造を見てるわけだから、ストックとフローの計算。複式簿記といえども、別に計算科学の話じゃないんだから、歴史的に見たときの必然性があるわけです。

ですからキャッシュフロー計算も同じことで、今はそういう実務はないし、しかも収支勘定設定するような発想も何もないし、間接的・直接法ですらやらない、文字通り間接法でやる。既存のB/S差額を使ってやるということ。

何が言いたいかというと、要するに、数学的な構造をもつというものと、歴史的な展開というものと照合しているものを思うわけですよ。それは過去から今まであるものの証明、論証にも使えるけれども、現在から将来への予見の手がかり、洞察にもなるだろうと。だから現に存在しないものを考えるということの意味合いが、そこにあるわけですね。

和田 まさにその存在しないものを考えるというのが、資料の5)の方法につながっていくのではないかと。

石川 だから現に存在するもの、実務だけれども、その議論じゃなくて、逆ですよ。存在しない簿記を考えるということが、どんな意味があるのかっていったら、それはある種、逆説的かもしれないけれども、まさに現にあるものの、その本質が浮かび上がってくるんですよ。

石原 そこで、ちょっとすみません。3つ系統、残高勘定系統、損益勘定系統、収支勘定系統って3つでやると、3つ並べて仕訳も可能だと思うんです。ただそのときは、今の簿記にはないマイナス数字を入れていかないと、仕訳ができないと思うんですけど、今、特にうちの大学の学生なんか見ていたら、複式簿記の残高で物を考えろっていったときに、例えば資産であれば、借方一貸方が残高ですよって言っても、なかなか理解してくれないケースがあったりするんですけど、そんなときに、マイナスをちゃんと入れてくれたら、きっちりスパーンと、すっきり残高出るのに、なんでわざわざ、例えば借方プラスのものが貸方がマイナスで、貸方プラスのものが借方がマイナスでって、そういうプラス・マイナスを左右に意味をもたせたのかっていう。理解のしやすさからいけば、マイナス数字を

入れてくれたほうが、最終残高を見る分には、いいのかなっていうふうに。

石川 1つの見方は、その数学（代数）の歴史というものを見ないと。つまりマイナスがいつから誕生するかということ、きちんとつかまないといけないけども、おそらく複式簿記の以前に、マイナスはあったんじゃないかと思うんです。だから1つの説は、マイナスというものを嫌うっていうかね、負のアボイダンスっていうか、回避するということがね。

石原 確かに、銀行にいたんですけど、計算するときにマイナス入ってくると面倒くさいんですよ（笑）。足し算と引き算が混じってる計算ってというのは、非常にやりにくいんですけど。

石川 だから、加算的減算というのは、アメリカでも、僕がいたときもそうなんだけど、現実にコンビニで買い物するときに、本当にするんですよ。例えば何か2ドルのものを買ったときに、10ドル札出すね。そうしたら、3、4、5、6と、こうくるわけですね。だから加算的減法と直接的減法との、つまり減算方式の違いというものも関わってると思うんです。これは試算表の構造に現れるんです。そうすると、キャッシュフローの2面計算も、直接法も間接法も、当然試算表の中に現れてくる。左側にストック勘定、右側にフロー勘定というふうに独立に配置すると。当然その貸借複記じゃなくて、例えばP/Lの交換取引は上下の複記になるわけです。上下のプラス・マイナスで。

で、大学では、学校で教えている左右貸借の仕訳ってというのが唯一絶対なんですか？と。実務にないものを教えるっていう意味は、例えば交換取引は実は左側の残高勘定で上下にプラス・マイナスよと、これでいいんですよ、ということが納得してもらえば、その瞬間にパッと相対化されるわけです。あ、簿記3級でやっているのは、1つの取引仕訳の形式なんだと、手段なんだと。これは非常に大事なことですよね。

実務に存在しないという話か。だから、例えば『複式簿記のサイエンス』の図表7.7、132ページ見てください。左のP/Lはおなじみのやつなんです。ただし、それは131ページの図表7.6の左を、期中の仕訳も省略してそのエッセンスを示しただけですけど。これはマイナスをプラスにすると（反対側に移すと）通常の仕訳に変わるんですが、徹底して左右に残高勘定と損益勘定を置いているだけの話です。そうすると財産法と損益法のかたちがそれぞれ左右にきれいに示されるわけです。そうすると、左の残高勘定だけだと単式簿記になって、それに損益勘定(名目勘定、フロー勘定)が入ってきて複式簿記、ダブルで損益計算できますという。

そうしたら、キャッシュフロー計算はどうなるんだとなるわけだが、全く同じ構造を持っているんですね。間接法が財産法であり、直接法が損益法に該当しているわけです。それを先の132ページの図表7.7は、こういうかたちで示しているわけですね。そうすると右のC/Fは存在しないものなんです。大事な点はここなんですよ。右は存在しないも

のを見せると、実は左の現に存在するP/Lのかたちがいつそうわかるじゃないですか、より高いレベルで。そしてこのヨコの関係も見えてくるんです。間接法の構造っていうのは財産法の構造と同じだなと。直接法は損益法と同じだなと。そして、間接法というのは単式簿記的な位置だな、ということもわかる。こういうところに狙いがあるわけです。全体の構造を見せて、同型を見せて、そして、そうすると直接法の位置づけも、非常によく見えてきますよね。

そうすると必然的に、実務で行われている、ああいう、まさに間接法的直接法っていうものが、本来の直接法じゃないということもわかってくる。じゃあ、本来の直接法って何かといたら、やはり名目勘定を入れないと、損益法に該当する同じ形が出てこない。ですから、複式簿記だけじゃなくて、単式簿記も同じかたちをしてると、こういう話になるわけです。

それから、これは計算の構造だけど、今度はさらに記録の構造にいくんですよ。個々の取引仕訳に。これも同じかたちをしてる、ということを説明したのが、128ページの図表7.4と図表7.5です。皆さんどう思われるかな。「本体と影」というたとえで説明するんです。要するに名目勘定（影の勘定）が入ると資本というものは期中の仕訳では隠れちゃうんです、現れてこないんですよ。確かにそうなんだよ、期首のままなんだもん、当たり前。だから期末に振替が必要なんですよ。だから、「影」の「本体」は何かといたら、やっぱり資本になるわけです。あるいは株式会社で言えば留保利益になるんですよ。つまり利益の留保、ストックです、累積です。

こういうふうに資本が隠れていくっていうところが、歴史的にも面白いんです。実際そうなるんですよ。同じことが実は、じゃあキャッシュフロー計算の複式を示してみましようといったのが図表7.5なんですよ。その（P/LとC/Fの）相互の変換の原理をまとめたのが、図表7.6なんですよ。

そういう話で、計算構造つまり計算システムの同型性だけじゃなくて、個々の取引仕訳あるいは振替という記帳システム、これだってそっくり同じかたちですよ、ということを示してみたわけです。

## 8) 現実に存在しないものを考えるー見えてくるもの

竹中 この先ほどの先生が示された、図表の7.6、確かに全く同型なんですけれど、これはまたキャッシュフロー計算から通常型の、キャッシュフロー計算書も損益計算書もそうですけれど、通常型の仕訳、貸借複記のかたちに戻していくと、矛盾が生じるっていうふうに先生おっしゃっているわけですよ。

石川 そうです。

竹中 私なりに矛盾の出所っていうのをずっと考えていたんですけど、やっぱり借方に、あるいは貸方に何を置くかっていう、その部分に規定されるのかなというふうに。端的

に言えば、例えば、先生、キャッシュフロー計算書の、こちらのほうの著作（文献⑤）に書いてらっしゃったんですけども、企業会計にとって最初から最後まで、具体・抽象の一对の動態関係として、っていうふうに書かれている部分があったんですが、つまりその具体・抽象が何かっていうと、結局ここでは現金と資本ということになってくると思うんですが、それが貸借規定性によって、これが矛盾として現れてくる、というのが1つの解釈なのかなと。

もう一つが、現金＝資本の貸借規定性というのが、実はこの企業資本の秩序の自然表現という、こういう解釈でいくと、矛盾として現れてくるかもしれないけども、記録・計算の道具というふう考えた場合には、これ果たして矛盾というふうに言えるのかなっていうのが、ちょっと私自身も疑問として感じているわけですけども、この辺り、先生ご教示いただけたらなと。

石川 かなり突っ込んだ議論というのか。2つあったわけね。そもそもこの矛盾の出所、何が矛盾しているのかってこと、まず理解してもらわないと、竹中さんの言っていることの意味がわからないと思うんだけど。

簡単にいうと、『複式簿記のサイエンス』の131ページの右側のC/Fの仕訳を、普通の仕訳に戻すんですね、形式その1ってやつに。通常の仕訳形式です。そうしますと、例えばなんでもいいんですが、例えば3番の仕訳のマイナスをひっくり返しますよ。（借方）給与支払 15（貸方）資本 15でしょ。よく見てください。ここにちょっと矛盾があるんです。

なぜかという、給与支払いっていうのは、もともと左のP/Lから見れば費用勘定ですよ。だから、そこでは資本はマイナス 15になっているでしょ、費用だから。収益だったらプラス。先ほど言った128ページ、その複式仕訳の要点（図表7.4と図表7.5）、何も間違っていない、論理一貫してるんです。で、もとに戻って131ページの右側のC/Fの仕訳をひっくり返します、普通の貸借仕訳のやり方に。そうすると、先にみたように、3番の仕訳で資本が貸方に15、その内容は給与支払いですから、なんで費用が貸方なのか、こうなるわけです。これ矛盾と言ってるんですよ。そこだけでなく、すべての仕訳が反対になるわけです、実は。

僕は、その矛盾はこういうふうを考えれば解決しますよ、ということを書いたのが文献⑩です。ここまでやり出すと、本当に興味のある人しか(笑)。その論文の補論2というところですよ。つまり通常形式の正体っていうものと、それから常に損益計算をベースに考えているということ。しかし、キャッシュフロー計算だと全部、貸借反対になるんです。B/Sの勘定科目は全部反対。資本が左借方、資産・負債は右貸方になるんです。だから何も矛盾していないんです。矛盾していることの出所はどこかという、思考が依然として損益計算の世界にとらわれているということ、それにとらわれてキャッシュフロー計算の仕訳を考えたから、こうなる。でも、これは難しい。でも面白い、原理的な見方の大切さという点でね。

僕は、もっといってね、それ2つ目の点にかかわるかな、フィニー勘定のね、ここに歴史専門の人がいるけど、泉谷説に注目しているわけです。(借方)現金=(貸方)資本、最初の出資金の話やけど、そこにどういことが書いてあるか、どこに着目するかっていうと、フィニー勘定の性格というのは、現金勘定の性格を内包した出資主勘定、端的には「出資主現金勘定」って言ってるんだよ。つまり資本 K の性格、現金勘定。これ、文献⑥の付論1に書いたけど、非常に僕はヒントになってね、論理と歴史の照合ということで、これは僕がやらないといけないんだけど。だから、レジュメの補足の1)に、A(現金)=K(資本)と、最初の払込資本の複式記入を書いた意味はそこです。これはその矛盾の出所と関係しています。竹中さんにやってもらえば、ありがたい(一同笑い)。歴史だから、橋本さんと、竹中さんで。

和田 それでは。

石川 3式簿記ですか。3式簿記の話っていうのは、非常に面白いのはどこかっていうと、端的には僕のテキスト『複式簿記のサイエンス』の第3章、48ページの図表3.7です。ここを理解してもらえば。だから、1つ1つの仕訳が3つ、3式記入になる、とかいう話じゃないんですね。システム全体の構造です。そして、図表3.7で言わんとしていることは、単式から複式、複式から3式、これは全く同じ論理です。それ言いたいところです。

それからもう一つは、ビルトイン機能という、これは複式簿記と全く同じ。で、そのビルトイン機能というものを言語としての簿記という、つまり「釈明と簿記」というところで説明しているのが、最後にハイエクの話にまでつながっていく。

こういうところに3式簿記を考えていく面白さ、それから意味ですね。意味というのは、複式簿記というものが、逆によくわかる、見えてくる、ということ。だから現に存在しないものを考えるということが、やっぱりここでも生きている。それをもう一度いうと、図表3.7の単式から複式、XからYの設定ですね。そして、複式から3式は(X=Y=Z)のZの設定だと。ですから、3式から今度は複式を見るという、図3.8から言えば、逆の矢印。そうすると、今度は逆に、Xだけ、つまり単式(1式)もわかってくる。こういうとらえ方ができるんじゃないかと。そうすると、また複式簿記、つまり2式簿記の構造が、3式簿記という1次元の高いレベルから相対化できる。これも1つの相対化の視点です。複式簿記とはそもそも何かっていうことを考える際に、現にある複式簿記の中でいくら考えても出てこないっていう限界がある。何か別物、ここでは現実にはないもの、これを持ってくることの大切さです。

## 9) 複式簿記の軽視という現状—現代会計のあり方と複式簿記

和田 それでは、最後の論点に移らせていただきたいと思います。レジュメ参考資料の7)の論点で、近年のIFRSのコンバージェンスやアドプションという議論の中で、複式簿記の記録というものが、非常に軽視されているというようなことが言われます。こうした複

式簿記の軽視という現状を、石川先生自身はどのように見ておられるのか、お考えをお聞かせいただければと思います。

石川 一番大きなところでいくと、レジメ1ページの下から3行目にある、やっぱり投資家の情報への役立ち、情報開示の優位性という今の会計のあり方と、複式簿記も含めた計算構造の希薄性っていうのは、これは表と裏だろうと思いますね。

1つの手がかりは、収支的損益計算という構造ですね。収支計算と複式簿記というのはつながってる。そうするとIFRS、あるいはそれを支える概念フレームワーク、そこにどのような計算構造があるかっていうのは、吟味する必要あるんですね。これは、一見すると資本等式の構造を持っているんですが、『複式簿記のサイエンス』の15章にも書いたように、勘定学説として、あるいは勘定理論として、あるいは会計構造として議論できるものかどうかっていうことを議論する1つの基準は、会計構造の違いの基礎に会計思考の違いがある、という話をしました。それが大きなヒントになるんじゃないかと思うんです。

そうすると、どういうふうに僕は考えたかということ、その概念フレームワークだとかIFRSの基礎、あるいは背後にある会計思考が何か、ということを吟味する必要あると。で、その会計思考って何かっていうのは、企業価値志向だ、というふうに書きましたけれども、結論から言えば、先ほどの収支計算というものをお話しましたけれども、それと馴染むものじゃない、性質の違うものだと。ちなみに、放送大学の講義では、「水の会計」に対して「油の会計」、こういうたとえで異質な会計だと。ガラガラした油が、これまでのきれいな水の領域に侵入、侵食しているとね。そういえばわかりやすいでしょ。

もう一度いうと、最初に言いましたよね、勘定理論とか、その学説史というかたちで、そもそもつかまえていけるようなものなのかっていうわけですよ。確かに、概念フレームワークも1つの計算構造を持っているようにも見えます。もっと言えば、資本等式の構造を持っているようにも。だって、収益費用は持分のコンポーネントと言ってるんだから、下位勘定ね。何の？資本でしょ？で、持分、資本は資産から負債を引いたものだと言っているんだから。何だ、先祖返りかと。そんなものは安平先生に言わせたら、多分、歴史的に淘汰されたものだよと。資本等式、貸借対照表等式、ずっときたわけじゃないですか。確かにバランスシート、資本等式であれ、貸借対照表等式であれ、バランスシートを基本にしているから、B/Sを中心にってるわけですよ。あと収益費用勘定の位置づけが、どう違うかという話だよ。あるいは、B/Sだけで見れば、負債を財産のマイナスと見るか、資本に近いと見るかというね。

いずれにしても、資本等式っていうのは、そういう学説史上の出発点だったわけですよ。人的勘定学説から物的にきて、シェアーがくるわけでしょ。ということは、やはり昔に戻ってるな、となるじゃないですか。だから一見そう見えるね、と言ってるのはそれ。一見というのは、もう一つの意味があって、そういう流れの中で、計算構造、会計構造、基本等式、勘定理論でつかまえられるのかどうか、概念フレームワークというのは。それには、その基礎にある会計思考という面から見るのが1つの見方じゃないかと。

じゃあ、現在のIFRSに代表される会計基準ですけども、そこにどんな思考があるのかと。「企業会計原則」見ましょうと。「企業会計原則」と概念フレームワーク、日本では2つある、極めて変則的。別の本(『変貌する現代会計』)にも書いたとおり、「企業会計原則」制定の立役者のね、中心人物の黒澤清は、「企業会計原則」は動態論に立脚している、こうはっきり言っているわけです。まさに収支的期間損益計算の構造を持っているわけですよ。だから僕は、シュマーレンバッハの動態論そのものを会計構造論的にやっぱり相対化せないかんとするんですけどね。会計構造論的にですよ、誰もやってないですけど。

ところが概念フレームワークは、動態論に何か修正して出てくるものですか？違いますよね。やっぱり動態論っていうのは、フロー中心に見て、連結環ですからB/Sというのは。連結環っていうのは主役じゃない、脇役ってことでしょ？主役のためにあるわけでしょ？脇役っていうのは。そうすると、どうも違うということがはっきりするわけですよ。じゃ、なんだということね。答えるのは難しいかもしれないけれども、企業価値というのを考えないと。今の会計は企業価値の評価に役立つものだ。そうすると企業価値というものを基礎にした会計構造ってものを考えないといけないわけですよ。さあ、そういうものが成り立つのだろうか。

複式簿記が収支計算というものを常に基礎に置いてきたということになれば、公正価値会計という、測定のレベルから見ても複式簿記に馴染むものじゃないと思いますね。だから、ますます複式簿記というものの行き着く先はですよ、不要不在。「油」の会計では。

ですから、ああいうIFRSの基礎にかかわっているテクニカルスタッフの人たちが、どんな簿記会計の教育受けてきたのかっていうこと、僕は本当には知りたいな。ボードメンバーじゃないんですよ。ボードメンバーもそうなんだけど、日本で言えば専門委員ですよ。僕は、推測の域を出ないけれども、もちろん会計構造論だとか学説史なんてやってる人いないと思います。やってるのは何かといたら、ファイナンスというものの専門であったり、資本市場というものの役割に専門の人だとか、あるいは統計的手法にたけた人だとか、そういう人たちがつくっているんじゃないかと、土台を。となってきたら、IFRSの中にどんな会計構造論的なものがあるかって議論してもですね、なんかこっけいな感じもするんですね。もともと違う性格のものを、土俵が違うのに同じ土俵と思って一生懸命やるってことの。やってもいいんだけど。

ですから、企業価値を志向する今の会計を、少なくとも伝統的な意味での勘定理論だとか、会計構造論で解こうとするときには、非常に無理があるんじゃないかというのが、僕の今の見方です。土俵が違うんです。同じ土俵でがっぷりよっつとつかない。同じ土俵ならいいんだけど。それを僕は、議論の「場」と言ってますが、その「場」そのもののあり方を見ないと。

#### 10) 方法の重要性－「見えないもの」を見せる

あとは、もう時間なくなったから、言いかけてやめたところ、後から出てくるかと思っ  
て……。僕にとって非常に重要なのは、だいぶ古いけど文献⑧(「構造としての会計科学」

1983年) なんです。そこに「親族の基本構造」と書いてあるんだけど。これ、レヴィ・ストロース、この前亡くなったけど。僕が大学院のときに、『悲しき熱帯』を文学部の大学院に受けに行ったぐらい、ある種のかぶれだった。ちなみに、その後は、数学の公理主義の集団ブルバキに行く。文献⑧の中にいっぱい書いているんだけど、非常に泥臭いその、ああいう文化人類学だから、でもそうした親族関係の中に数学的な構造を見つけるんですね。代数の「群」の構造なんだけれども。こういうところに、ものすごい関心があったわけです。

生々しい商人の営みからでてくる複式簿記という記録計算も、同じように見るんです。どっかに隠された構造がないのかと。そういう発想があるんです。そういう発想というのは、非常にその、安平理論をベースにしたら、こうなんか入ってくる、僕には。もちろん企業資本の運動を説明する、というところにも今言った構造主義的な思考方法に馴染むところ、見つけてやることも可能かもしれないですよ。やってみたい気もあるんですよ。はっきり言えば、なんでもいい。なんでもいいっていうのは、企業資本運動の学説でも、ケーファー・安平理論でも。僕のやりたいことは、このドロドロした生々しい人間の営みの中に、実は極めて数学的な構造というものがあるんだ、ということを示してみたい。「親族の基本構造」のようにね。

で、僕はよく例に出すんだけど、自然数をどうやって発見するか、「ペアノの公理」。ああいうところがすごい魅力的でね。だからそういうところに、実はやっぱり僕が若いときに、ある種はまった、こういうものがすごい影響を受けているなど。そういうようなことは、文献⑭の慶応で話した「会計研究のアンビバレンス」の中にも書いてます。これがやっぱり方法というものをかなり意識して、つまり「見えるもの」じゃない、反対、「見えないもの」を見せていくという。つまり、親族の構造っていうのは、見えないわけですよ。僕がよく使うH<sub>2</sub>Oのたとえもそうなんですけど。例えば、『複式簿記のサイエンス』の図表12.2の構造と形態と形態化(契機・条件)、この3つがそれ。構造は見えません、サイエンスの眼でしかね。

もう一つは、木村説の方法論。木村先生には、明確に弁証法的な思考がある。この弁証法っていうものも、また非常に重要だと思うんです。何も古くもない。やっぱり社会科学的事物、出来事を根底的なところから洞察していく、そのメソドロジーとしての弁証法、あるいはここで取り上げた構造主義的な思考方法、こういうものは非常に重要であって、だから会計の中でやるより、だから僕は「雑学のすすめ」って、先の慶応での話の最初のタイトルは、実は「雑学のすすめ」だったんです。慶応でやるから、「学問のすすめ」にひっかけて。でもそう思われるのが嫌で、変えたんですよ(一同笑い)。

では何にするかと、それですぐ出てきたのが、「たかが会計、されど会計」。僕は、会計を「されど会計」にどうもっていくかということが、ずっとあったからね。それをやらないと、僕は成仏しない、なんて言ってたから。でもよく考えたら、このアンビバレンスなど。アンビバレンス。結局、「会計研究のアンビバレンス」の中で、あっちこっちとさまよっているわけ。

ですから、僕は福岡大学時代のオペレーションズ・リサーチや多変量解析を教えるところが、一番ハッピーというか、幸せだったんですよ。で、だんだんアンハッピーに入っていくんですね(笑)。「お前、会計士2次試験通ってるから、会計できるやろ」と言われるわけだな。確かに実務経験あります。7, 8年やったかな。でも、続けてやりたくなかった。

大きなことは、実務補修のときに、アイジリに会ったことがね。最初にも言ったけど。後にカーネギーの本場に行って、人間井尻の、その魅力に取り付かれちゃって、どうしても魅力ある人の作品が読みたいと。そうすると、会計から離れよう、離れようとしたら、新たな作品がでてくるわけ。どうしても自分がやっぱり探求したいわけだから、離れきれない。そういうかたちで、幸か不幸か、今でもわかりませんが、本当にわかりませんが、ずっとここまで。

ですから、若い人に言いたいのは、雑学っていうのは本当に大事だよと。雑学というのは、雑多なことをやるという意味じゃないんです。本当の会計の見方は、別のものからやっぱり見ていかないといけない、というのが必ずある。だから会計の中だけで一生懸命やってる人の限界っていうのは、何年かやってたら、自覚するもんだと思うんやけどね、僕はそう思います。だから複式簿記もそうですよ。だから僕がずっと、僕は必ずしも専門じゃないけども、キャッシュフロー計算の複式簿記というものに、ちょっとこだわってみたのは、アイソモヒズム (isomorphism)、同型性、あるいはシンメトリー、そういうものを探してたんです。それは、別物を持ってこないといけない、研究対象には。別物、違うものをね。ただし、何でもいから別物を持ってくりゃいいってもんじゃない。何か同型性をはらんだものを持ってくる必要がある。そうすると相対化がはじまるんです。

そうすると、キャッシュフロー計算の方法に2つあるじゃないかと、2つの作成法がね、直接法と間接法。だからもうはらんでいるわけですよ。あとはそれを論証するだけの話。で、僕は僕なりに、論証したわけです。誰も納得してくれないかも知れませんが(笑)。1人でやっとな、という感じだと思いますよ。でもいいんです。そういう意味ではね、物事を徹底的に相対化することさえ。ですから簿記にしろ、会計にしろ、少なくとも教育の姿勢というのは、そういう、すべて素材だ、材料だという発想でやってますから。相対化すること、あるいは、わかりやすく言えば、常識とか通念とか、もっといけば時代の風潮とか、そういうものにとらわれない自分を確立していくことだろうと。それは、タテやなくて、「ヨコの学習」が大事よと。ものごとの真の姿が見えてきた、そういう「見えてくる」感覚が大事だと。

### 11) 本当に役立つとは—「教養」としての会計学

じゃあそういうのを獲得するには、どういうことが大事かということ、その一端は、学生に自分が経験したことは教える、教育する。それが簿記であれ会計であれ、あるいは何であれね。ですから、常に心がけていることっていうのは、そういうことであって、それを突き進めて行くと、やっぱり「教養としての会計学」ということ、放送大学でやっているんだけど、放送大学は大学院を除いて教養学部しかないからね。でもそうじゃなく

て、本当の「教養」というもの、つまり「生きていく」ということ、こことつながらないと駄目よと。結局、自分のこと言ってるんですよ。そうじゃなかったら、やれないもん。やれない。冒頭で震災の問題にふれたのも、実はそことすごくつながっているんです。

ですから、結局、今役立つものだけを教育するんじゃなくて、逆説的だけど、今すぐには役立たないものこそ教育せんといかんと、それが実は本当に役立つことなんだと。ですから国家試験に歴史は出ない、だから歴史やっても役立たない。でも本当に役立つんだよ、という教育をね。試験にでないから教育しない、というのとまったく逆ね。僕は簿記教育やるときに、まず先にやるのが、歴史をやりますね。できあがった複式簿記ではなく、出来上がるまでの簿記をね。だから「3級の勉強をやらさんか」といったら、「やらさん」というわけじゃないけれども、「自分でやれ」と。その学習の仕方やガイダンスだけは、3回ぐらいの講義だったらしてもいいけど。それぐらい、本当はやりたくない。だって3級ぐらい独学でやれるでしょう、大学入試受けて入学してるんでしょうと。

だから、結局、僕はそうだな、やっぱりこの教育という面で、研究よりは教育というのが大切だなと。研究というのは、補足の3)のホームページにある⑬「批評眼の大切さ」だけど、まあはっきりいって、何のための学問かと、厳しい言い方だけど、独りよがりの「学問ごっこ」のようなことはしたくない。それは、意識するしないにかかわらず、僕はかなり意識しているけど、プリデンドだな。自分も含めてなんだけど。

「生きていく」ということ、そういうものの支えになるものかどうかっていう、そういうことが、簿記や会計でもできるんだと。だから僕は、俗っぽい簿記や会計の世界でも、本当の意味の「教養」につながるものなんだということを、あるいはそういうものでありたいということを、それが「されど会計」ということの意味だと。「たかが会計」に終始しちゃ駄目だよと。

結局、冒頭での石巻の竹中さんとのお話なんですけど、今どういう性質の危機にあるのか、そのなかでの僕たちの研究や教育のあり方という点で強調したことになるな。何のための学問か、学問の力はあるのか、教育の力はどうなのか、ということでしたが、これでやっぱり冒頭とつながったね。

和田 石川先生、長時間にわたり本当にありがとうございました。一応これで、インタビューのほうは終了といたします。きょうはありがとうございました。

石川 なんか質問者が硬いね(一同笑い)。答えにくいよ(笑)。大変だったけどね、ご苦労さんでした。

橋本 ありがとうございました。

(了)

付記(石川):インタビューの時間制約でお話しできなかった論点など、補足のために拙稿「複

式簿記の見方・考え方・教え方—理論・歴史・教育の接合—(上)(下) (駒澤大学『経済学論集』第44巻第1号、同第2号、2012年9月、同12月予定)をあらためて書き記しました。インタビューと合わせて、ご参考にしてもらえば幸いです。なお、事前に用意したレジюме資料はホームページに掲載しています。

追記(橋本・和田):事前にいただいたレジюме資料から関連文献だけ記載しておきます。インタビューにでてきた関連文献の参考にしていただければと思います。

#### 関連文献

- ① 石川純治(1993a)「試算表等式論覚書(1)—『2面的損益計算』説と『企業資本運動』説—」『経営研究』第43巻第5・6号。
- ② // (1993b)「試算表等式論覚書(2)—『2面的損益計算』説と『企業資本運動』説—」『経営研究』第44巻第1号。
- ③ // (1996)「企業会計システムの簿記論的基礎とその展開—安平昭二著『会計システム論研究序説』によせて—」『経営研究』第47巻第2号。
- ④ // (2004)『経営情報と簿記システム—簿記の伝統と革新—(4訂版)』森山書店。
- ⑤ // (2005)『キャッシュ・フロー簿記会計論—構造と形態—(3訂版)』森山書店。
- ⑥ // (2007)「資金計算書の歴史的展開と数学的展開—その照応関係の一視点—」『駒沢大学経済学論集』第38巻第4号。
- ⑦ // (2011)『複式簿記のサイエンス—簿記とは何であり、何でありうるか』税務経理協会。
- ⑧ // (1983)「構造としての会計科学」『福岡大学商学論叢』第27巻第4号。
- ⑨ // (2010)『変わる会計、変わる日本経済』日本評論社。
- ⑩ // (2008)放送大学(DVD全15回)「現代の会計」放送大学教育振興会(発売は丸善)(2012年より新番組「社会のなかの会計」)
- ⑪ // (2012)「複式簿記の相対化—より原理的なものへ—」『税経通信』1月号。
- ⑫ // (2012)『『金融・開示・取引法』優位の現代会計』「企業会計」2月号。
- ⑬ // (2007)「批評眼の大切さ」HP「学会・セミナー」コーナー(駒澤大、京都大、大東文化大)
- ⑭ // (2004)「会計研究のアンビバレンス」HP「講演」コーナー(慶応義塾)
- ⑮ Ijiri Y. and J. Ishikawa (2002), "Balance Sheet and Change Sheet", *Osaka City University Business Review* No.13.

参考：レジュメ資料

簿記学会インタビュー  
ー理論・歴史そして教育の接合ー

石川純治（駒澤大学）2012年2月28日

I 理論

- 0) 故安平先生の「遺言」（2004年5月）：その意味合いは→文献⑥15-16ページ  
「遺言」の重要性はどこか：大きな宿題（安平問題）文献⑥17ページ  
複式簿記の弾力性、柔軟性、フレキシビリティとは、人工的な道具と企業資本の自然の表現
- 1) C/Fの複式簿記は考えられるか：Yesの簿記観、Noの簿記観  
例：①「算法的」試算表等式観 vs. ②「実体的」試算表等式観（文献②）  
安平（組込論）vs. 木村（転化論）、山榘・笠井（分化論）：文献②10ページ（図4.1）  
↓ 単式簿記をどう捉えるか→②での単式簿記は？：文献③33ページ  
（コジオール→ケーファー・安平）
- 2) 会計構造の相対性：文献⑦第14章、（松本書評）  
文献③→費用・収益勘定の性格をめぐる、名目勘定性（反対記帳性）の意味（安平説）
- 3) 現実に存在しないものを考えるということ：より原理的なものへ→文献⑩  
現実（実務）に存在しない簿記を考える→「複式簿記とはそもそも何か」を浮き彫りにする  
C/Fの複式簿記→文献⑦第7章および文献⑩、通常形式の正体と「矛盾」の出所→文献⑩  
補論2  
「計算」のみならず「記録」（複式仕訳）の相対性：文献⑦p.132 図表7.7  
3式簿記をどう捉える→文献⑦第3章（p.48 図表3.7 および p.54 「ハイエクの含蓄」）
- 4) 「複式簿記とは何でありうるか」という問いかけの意義  
複式簿記の同型性と相対性：文献⑦テーマⅢ  
┌ 複式簿記とは何か→「同型性」と「相対性」  
└ 複式簿記とは何でありうるか→「構造」と「形態」  
→構造の「同型性」、形態の「相対性」：文献⑦p.108 図表6.2
- 5) 方法について  
肉眼では「見えないもの」を「見せる」：サイエンスの眼（文献⑦第12章）  
5つの「対概念」と「つなぐもの」という思考（文献⑦202-204ページ）：  
構造－形態、同型性－相対性、技術性－歴史性、普遍性－特殊性、形式－内容  
構造主義的思考：例『親族の基本構造』と「群」（文献⑧12ページ）  
田中書評の指摘（方法論的二刀流）

弁証法は特に意識せず、結果的にはその見方に通じる：素材と形式→文献⑧p. 16 注2

## II 歴史

### 6) 理論と歴史の照応：どのように照応しうるか

論理的相対と史的相対：その接合の試み→文献⑥（図表6）、その意義：文献⑦207 ページ

### 7) 現代会計と複式簿記：文献⑦第15章

現代の会計、IFRSの会計→“複式簿記不要不在”の会計への方向

収支計算と複式簿記→IFRSと収支的損益計算の構造

IFRSにどのような計算構造がある？（文献③補論2）、複式簿記の意義はある？

情報開示の優位性と計算構造の希薄性：文献⑫

簿記と会計の関係→文献⑦p. 258（基本等式の会計・理論性、図表15.1）、文献②「2項化問題」と「2項の関係問題」

## III 教育のあり方—私の考え方・姿勢—

### 8) 常識や通念に「とらわれない」ということ：文献⑦を貫くもの（あとがき参照）

「検定簿記」、「受験簿記」それ自体の相対化、大切な学習姿勢：文献⑦269-70 ページ

「見えてくる」学習、「ヨコ」学習の大切さ：文献⑦コラム5、コラム7、コラム8

### 9) 社会科学としての簿記教育：歴史の文脈で捉えるということ

歴史的視点の大切さ、発展的に捉えるという教育姿勢。

### 10) 最後に：「教養」としての簿記会計を（放送大学第1回）

いつも心がけていること、私の教育の姿勢・目標：端的には文献⑦コラム6

本当に役立つとは、今すぐに役立つというものではない：「学ぶ喜び」を（補足2）

「今、大切なことは」→文献⑨227-28 ページ

## 補足

#### 1) 複式簿記と名目勘定：その位置、（渡邊書評）

文献⑥付論1「複式簿記の起源論」：木村・小島、泉谷（特に「フィニー勘定」の性格規定） $A$ （現金）= $K$ （資本）

#### 2) 放送大学での講義：「学ぶ喜び」

文献⑩の第1回～第5回（特に第1回での「学ぶ喜び」）

ビジネスのスキル（キャリアアップ）という側面だけではだめ（偏重）、

「相対化なくして真の姿は見えず」

#### 3) 何のための学問か、人の力・教育の力・学問の力、風潮に流されない→文献⑬5、6、

7